

多賀城市文化財調査報告書 第35集

市川橋遺跡 ほか

— 平成5年度発掘調査報告書 —

平成6年3月

多賀城市教育委員会



巻頭図版 調査区航空写真

序 文

埋蔵文化財は、多賀城市の歴史を知るためには欠くことのできないものであり、また、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであるため、その適切な保存と活用を図っていくことは極めて重要なことであります。

しかし、昭和50年代から埋蔵文化財包蔵地内における宅地開発等が急増したため、本市は、昭和54年から専門職員の配置を行い、昭和62年には埋蔵文化財調査センターを設置し、これらの開発と埋蔵文化財の保護との調整を図る体制の整備を実施し、今日に至っております。

さて、今回の調査は、将来大規模な宅地開発が予想される市川橋遺跡ほか1遺跡の遺構確認を目的として平成5年10月から実施したものであります。

多賀城市は、面積19.66km²の約25%が特別史跡指定地を含む埋蔵文化財包蔵地であります。その大部分は奈良時代から平安時代にかけての多賀城関連遺跡であり、古代多賀城の歴史解明に調査研究の主力がおかれてきました。今回の新たな遺構発見を契機に、平安時代後期以降多賀園府と呼ばれた当地域の歴史解明も大いに進んでいくものと考えております。

最後に、今回の調査に当たり御指導、御協力を賜りました文化庁、宮城県教育庁文化財保護課及び宮城県多賀城跡調査研究所並びに地権者の皆様に対して厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月

多賀城市教育委員会
教育長 櫻井茂男

目 次

調査に至る経緯	1
市川橋遺跡第14次調査	3
大日南・門間田地区試掘調査	55

例 言

1. 本書は平成5年度に国庫補助事業として実施した市川橋遺跡第14次調査及び大日南・門間田地区試掘調査の成果をまとめたものである。

2. 遺構の名称は第1次調査からの一連番号である。

3. 本書中の遺構の分類記号は次のとおりである。

SB：建物、SD：溝、SK：土壌、SX：道路

4. 本書挿図中のレベルは標高値を示している。

5. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用し、原点X=189000.000m、Y=13926.000mを通る南北方向の直線を南北基準線、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。この原点を0として調査区内に3mの方眼を組み、東西方向は原点から東をE、西をWとして原点から1m離れるごとにアラビア数字でE1・E2・E3…、W1・W2・W3…と表わした。南北方向は原点から北をN、南をSとして同様に表わした。

6. 方位の標示は座標北を示している。

7. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1973)を参照した。

8. 発掘調査および本書の作成に際しては、次の方々および機関から指導・助言を賜わった(敬称略)。

桑原謙郎、小井川和夫(宮城県教育庁文化財保護課)、千葉景一、蓮藤秋輝、丹羽茂、真山 悟、佐藤和彦、柳沢和明、白崎恵介、鈴木拓也(宮城県多賀城跡調査研究所)、古川雅清、文化庁記念物課、宮城県教育庁文化財保護課

9. 本書の執筆・編集は調査員の千葉孝弥、武田健市が行なった。おおよその分担を示すと次のとおりである。

調査に至る経緯—千葉、市川橋遺跡(第14次)Ⅰ—千葉、武田、Ⅱ—V—千葉
大日南、門間田地区試掘調査—武田

また、これらの作業を大山真由美、福原弥子、柏倉霜代、黒田啓子、梅田律子が援けた。

10. 調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

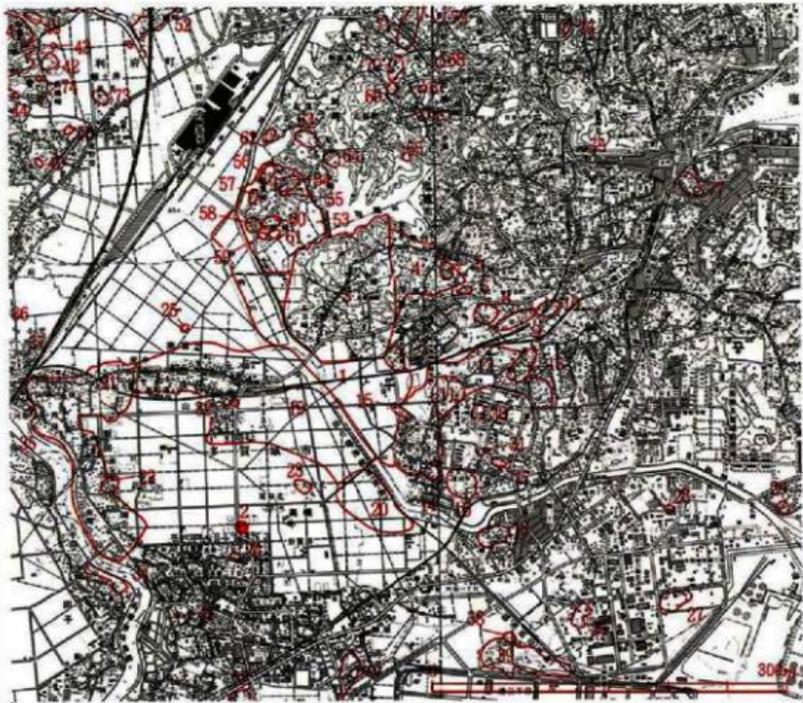
調査に至る経緯

多賀城市は、昭和50年代から埋蔵文化財包蔵地での宅地開発が増加の一途をたどり、今日に至っている。昭和50年には人口4万3千人であったのが、平成6年には5万9千人にも増加していることがそのことを如実に示している。市川橋遺跡に含まれる浮島、高平、水入地区においては、昭和58年頃から小規模な宅地開発が行なわれるようになり、良好な状態で残っている埋蔵文化財が虫喰い状に侵食され始めた。また、数年後にはそれらとは比較にならない程大規模な土地区画整備事業が施工されるという可能性が生じてきている。これは、多賀城跡南面一帯を対象とするもので総面積約30万㎡という膨大なものである。この事業が実施されれば地下に無数の遺構、遺物が眠る多賀城跡南面一帯の景観は、美しい田園から一変して住宅地に変貌することになり、文化財側としてはまさに危険な状態に直面していると言うことができよう。しかし、一部では史跡のまちにふさわしい都市計画を望む声もあり、そのためには文化財側との連携が必要であるとの認識も芽生えてきている。文化財をとりまくこのような情勢の中で、多賀城跡南面一帯における遺構の分布状況を早急に把握する必要が生じてきたため、市川橋遺跡第14次調査として確認調査を実施したものである。

大日南、門間田地区については、地理的に見て広い微高地上に立地するという好条件下にありながら、従来埋蔵文化財包蔵地として認識されてはいなかった。しかし、本地区の北東約0.6kmの地点には大日北遺跡、南西約1.1kmの地点には発向遺跡、南約1.1kmの地点に高柳B遺跡(仙台市)、南約2.1kmの地点に高柳A遺跡(仙台市)と微高地上にはいくつかの遺跡の存在が知られている。本地区においても、近年土地区画整備等大規模な開発計画が生じる可能性がきわめて高いことから、埋蔵文化財の有無を知るため試掘調査を実施したものである。



第1図 遺跡の位置



番号	道跡	時代	番号	道跡	時代	番号	道跡	時代
	多賀城市		27	家原道跡	古代	52	八幡崎日道跡	縄文～古墳, 平安
1	市川橋道跡	縄文～平安	28	榎木道跡	不明	53	加瀬渡跡群	縄文, 古代
	高橋門前田, 大目内地区		29	西原道跡	古代	54	台城道跡	縄文
3	特別支路多賀城跡	奈良, 平安	30	野原敷道跡	中世	55	台城C道跡	古代
4	西沢道跡	古代	31	榎野敷古墳	古墳後	56	台城日道跡	古代
5	法性院道跡	古代	32	山玉山地田成跡	古代, 中世	57	福龜崎道跡	古代
6	高原道跡	古代, 中世, 鎌		仙台市		58	福龜崎B道跡	古代
7	特別支路経城道跡	古代, 中世	33	高柳台道跡	古代	59	松崎A道跡	古代
8	小波原道跡	古代	34	堀下道跡	平安	60	松崎B道跡	古代
9	野所道跡	古代, 中世	35	堀ノ家道跡	平安～古代	61	松崎C道跡	古代
10	矢倉ヶ館跡	古代, 中世	36	堀ノ口道跡	平安～近世	62	北園道跡	古代
11	特別支路多賀城庚申跡	奈良, 平安	37	堀ノ口古墳群	鎌倉	63	天形道跡	古代
12	高崎道跡	伊賀～中世	38	遠藤館跡	中世	64	雀道跡	古代
13	関ヶ谷館跡	中世	39	沼向道跡	古代	65	加瀬貝塚	縄文中, 古代
14	軍田中隊城道跡	古代, 中世	40	出花道跡	古代	66	十三塚道跡	
15	高崎古墳群	古墳中, 後	41	正平親王の舟	鎌倉	67	山形道跡	古代
16	志引道跡	和石跡, 古代, 中世		利府町		68	山形野道跡	旧石形, 縄文
17	桜井道跡	中世	42	北條野館道跡	古代	69	岡女野道跡	縄文中, 後
18	八幡道跡	古代, 中世	43	法印塚古墳	古墳	70	天神台道跡	平安
19	山王道跡	古墳, 奈良, 平安	44	麻島地蔵堂古墳群	古墳	71	柳井道跡	縄文, 古墳, 古代
20	六貫田道跡	古代	45	穴ヶ沢道跡	古代	72	池島宮道跡	旧石形
21	新田道跡	古墳～中世	46	笠野沢道跡	古代	73	伊豆佐北亮神社	平安
22	安楽寺道跡	古代末～中世	47	伊豆野神社跡(穴沢遺跡) 伊豆野神社跡(穴沢遺跡)	古墳前後	74	馬場崎道跡	古代
23	大目北道跡	古代	48	山原代道跡	古代		塩釜市	
24	尾向道跡	古代	49	西天神道跡	古代	75	塩釜神社境内道跡	縄文後
25	内館道跡	中世	50	産野坂道跡	古墳, 平安	76	浪水沢横穴古墳	平安
26	八幡沖道跡	古代	51	八幡崎A道跡	古代	77	塩釜古館跡	中世

第2図 遺跡分布図

市川橋遺跡第14次調査

目 次

I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	5
II 調査方法と経過	8
III 層 序	9
IV 発見した遺構と遺物	13
1. 掘立柱建物跡と出土遺物	13
2. 溝跡と出土遺物	24
3. 土壇と出土遺物	29
4. 堆積層出土の遺物	32
V 考 察	36
1. 遺構の年代	37
2. 多賀城南面における方格地割と本調査区との関係	38
3. まとめ	40

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 市川橋遺跡(宮城県遺跡登録番号 18008)
2. 所 在 地 宮城県多賀城市浮島字高平20・21・22-1
3. 調 査 面 積 1,724㎡(対象面積2,527㎡)
4. 調 査 期 間 平成5年11月8日～1月25日
5. 調 査 主 体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
6. 調 査 担 当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 杉田 裕孝
調査員 千葉 孝弥 武田 健市
7. 調 査 参 加 者 赤間栄二郎、赤間かつ子、阿部 保、阿部美智子、泉 洋
伊藤 正直、内海 義雄、遠藤 一代、太田恂一郎、熊谷あつ子
下道 博信、鈴木 太仲、高野 敏子、高橋 紀雄、角田 静子
橋本 菘、星 秀雄、矢羽々 力、渡辺 幹子

I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

遺跡の位置：本遺跡は仙台市の中心部から北東約10km、多賀城市のほぼ中央に位置しており、市の中央部を南流する砂押川の東岸から東側の丘陵地にかけて、標高3～2mの微高地上に立地している。南北約1.6km、東西約1.4kmと広い範囲を占める大規模な遺跡である。現在の海岸線までは、北東へ約3.5kmで松島湾、南へ約2.5kmで太平洋に達する。

地理的環境：多賀城市は、市内のほぼ中央を流れる砂押川によって、東側が丘陵地、西側が沖積地と東西に大きく二分されている。丘陵地は、松島丘陵からのびる段丘陵の内塩釜丘陵と呼ばれるものである。標高80m未満の緩やかなこの丘陵上には、特別史跡多賀城跡やその付属寺院である多賀城廃寺をはじめ多くの遺跡が立地している。一方、本市の西半部を占める沖積地は広範の仙台平野の一部で宮城野平野と呼ばれるものである。この沖積地には、砂押川や七北田川沿いに自然堤防が発達している。また、県道泉・塩釜線沿いにも旧七北田川によって形成されたといわれる自然堤防があり、その他の地域には旧河道や後背湿地が複雑に分布している。自然堤防上には本遺跡をはじめ山王遺跡や新田遺跡などが相接して立地しており、大規模な遺跡群を形成している。

本遺跡内の地形について細かく見ると、微高地の分布については、鴻ノ池橋から多賀城廃寺に至る市道新田上野線沿いの5～9、A・C地点(第3図)、砂押川沿岸のE地点、多賀城南門の南部から南西部の11・13地点にかけてみられる。一方、低湿地は多賀城南門の南東部、A地点の北側などに広く分布している。しかし、C地点では地山が砂質土であるのに対し、市道をへだてた5地点の西半部は低湿地となっていることや、11・13地点では南北に大きく沢状の湿地が入り込んでいるなど旧地形はかなり複雑であったことが判明している。

歴史的環境：本遺跡は縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡として知られている。縄文～古墳時代については不明な点が多いが、奈良・平安時代については各地区から豊富な資料が発見されている。本遺跡と他遺跡との位置関係についてみると、本遺跡の北側には特別史跡多賀城跡、東側には多賀城廃寺跡と高崎遺跡、西側の微高地上には山王遺跡、更にその西側には新田遺跡など広大な遺跡が相接して並んでいる。多賀城は奈良・平安時代に陸奥国府、奈良時代には鎮守府も併せ置かれた陸奥国の一大中心地であり、多賀城廃寺はその付属寺院である。新田、山王、高崎遺跡はいずれも古墳時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である。また、本遺跡と高崎遺跡の間には古墳時代中期と推定される丸山園古墳群、後期の稲荷殿古墳などの高塚古墳があり、多賀城南門のやや西側には田墾場横穴墓群がある。本遺跡の北東部には小規模な低丘陵がいくつかあり、その内最も大きなものが館前遺跡である。平安時代には官衙或は上級官人の邸宅として、中世には武士の館(たて)として使用されている。このように、本遺

跡の周辺には古墳時代から中世にかけての多くの遺跡が見られる。これらの遺跡は、便宜上それぞれ遺跡名を付して区別しているが、平安・奈良時代についてみれば、多賀城をとりまく一連の遺跡として把握することができるものである。

番号	調査年次	調査地区	発見遺構	年代	原因	調査主体
1	昭和56年度	市川字伏石	道跡跡、溝跡、水田跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第1次調査)
2	昭和57年度	市川字伏石	溝跡、水田跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第2次調査)
3	昭和58年度	浮島字高平 (大原宮)	竪立柱建物跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第3次調査)
4	昭和58年度	高崎字水入	溝跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第4次調査)
5	昭和59年度	浮島字高平	竪立柱建物跡、溝跡、溝跡、水田跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第5次調査)
6	昭和61年度	浮島字水入	溝跡、土坑	平安時代～近世	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第6次調査)
7	平成元年度	浮島字高平	井戸跡、溝跡、土坑、水田跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第7次調査)
8	平成元年度	高崎字水入	竪立柱建物跡、溝跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第8次調査)
9	平成元年度	浮島字高平	竪立柱建物跡、溝跡	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第9次調査)
10	平成4年度	市川字伏石	道跡跡、竪立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、井戸跡、溝跡、土坑	古墳時代～近世	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第10次調査)
11	平成4年度	市川字館前	道跡跡、竪立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡	平安時代	多賀城市中央公園 建設工事	多賀城市教育委員会 (第11次調査)
12	平成5年度	市川字涌ノ池	道跡跡、竪立柱建物跡、河川跡	平安時代	道跡拡幅工事	多賀城市教育委員会 (第12次調査)
13	平成5年度	市川字館前	道跡跡、竪立柱建物跡、竪穴住居跡、土器発見等	古墳時代～ 平安時代	多賀城市中央公園 建設工事	多賀城市教育委員会 (第13次調査)
14	平成5年度	浮島字高平	竪立柱建物跡、溝跡、土坑	平安時代	宅地造成工事	多賀城市教育委員会 (第14次調査)
A	昭和48年度	浮島字高平	竪立柱建物跡、竪穴住居跡	平安時代	城南小学校建設	多賀城跡調査研究所 (第22次調査)
B	昭和53年度	市川字伏石、館前	溝跡、土坑		仙臺院地下水道事業	宮城県教育委員会
C	昭和54年度	高崎字水入	竪立柱建物跡、井戸跡、溝跡	平安時代	第二集電電線交換局 建設	宮城県教育委員会
D	昭和54年度	浮島字高平	竪立柱建物跡、溝跡	平安時代	下水道埋設工事	多賀城市教育委員会
E	昭和55年度	市川字館前	道跡跡、竪立柱建物跡、 一本柱列、井戸跡、大溝跡	奈良～平安時代	電気工庫店建設	多賀城跡調査研究所 (第37次調査)
F	平成5年度	高崎字水入	なし		水路改良工事	多賀城市教育委員会 (立会)調査

表1 調査成果一覧表

II 調査方法と経過

今回の調査区は、大規模な掘立柱建物跡を発見した第3次調査区のすぐ南側であり、周辺の各調査区でも多くの遺構、遺物を発見していることから本調査区においてもそれらと同時代の遺構の存在を予想することができた。近年、多賀城跡の南面に位置する山王・新田遺跡及び本遺跡の調査では、隣接する調査区でも遺構のあり方が異なるなど古代の土地利用の実態について興味深い成果が得られている。はじめに「調査に至る経緯」で述べたように、今回の調査は当該地における遺構のあり方を知ることが目的としているため、調査対象面積2.527㎡のほぼ全体にわたって確認調査を行うこととし、遺構の断ち割りなどは最小限にとどめることとした。

調査区の現況は水田となっており、水田面の高さは東半部が西半部より一段低くなっていた。部分的に坪掘りしたところ、西半部は表土である現水田床土の下からすぐ地山に現われたのに対し、東半部はいくつかの堆積層が存在するというように大きな違いが見られた。11月8日、重機を導入し、西端部から表土剝離を開始した。また、東端部に南北トレンチを設定し、堆積層のあり方を調査した。その結果、現地表から約1m掘り下げても地山は現われず、珪泥炭層が厚く堆積しているようであり、遺物も全く出土しなかった。このことから東半分の低湿地部分は平面的な調査は不必要と判断し、西半分を中心とした調査方法に切り換えた。11月16日、表土剝離が調査区ほぼ中央部にさしかかったところで、かつて大臣宮が祀られていた低丘陵の南端部を発見した。11月18日、低湿地部分の様相を把握するため、北壁に沿ってトレンチを設定した。その結果、現地表から約0.6m下に暗色粘質土があり、その上面のくぼみに10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰がブロック状に堆積していたことから、低湿地の形成された年代の一端をおさえることができた。11月24・25日、業者に委託してトラバース測量、方眼杭打ち測量、水準点移動を行ない、実測図作成の準備をした。11月26日、西端部から遺構検出作業を開始した。また、平面プランや他の遺構との重複関係について一応の整理のついたものから20分の1のスケールで平面図を作成していった。低湿地部分については、灰白色火山灰



第4図 調査前の状況 (左：西から 右：南西から)

降下以後の堆積層である第Ⅲ層より新しい遺構は発見できなかったため、12月7日から低湿地北半分のみ第Ⅲ層を除去し（～9日）、第Ⅳ層とそこから掘り込んだ溝跡などを発見した。これらについては、西半部と同一の測量基準線を用い、100分の1のスケールで実測を行ない、12月15日に写真撮影を行なった。東半部、西半部とも平面的な調査が一応終了したため、12月21日に小雨の合い間をぬい、ローリングタワーを用いて調査区全体の写真撮影を行なった。12月22日、東半部における溝跡のあり方を知るため、第Ⅲ層を除去しなかった南半分に4つのトレンチを設定し、北半部で平面的に検出したSD554・555溝跡などの南北溝の延長部分を把握することができた。12月の調査は24日までとし、年末年始の休みを経て、明るく1月10日に調査を再開した。SB541建物跡は精査の結果同位置で2時期重複していることが判明し、検出したほぼすべての柱穴でそれを検証することができた。1月11～17日にはSK571土壇などの断ち割りを行ない、断面図を作成し、写真撮影を行なった。1月19日、西半部で発見した建物跡の柱穴埋土を記録し、西半分の調査を終えた。1月20日、西半分の遺構について、山砂による埋め戻しを開始した。1月21日、東半部における溝跡、各堆積層の範囲などの実測図を作成した。1月24日、東半部で検出した溝跡について、各堆積層との関係および他のものとの重複関係の最終的な整理を行なった。1月25日、西半部の埋め戻しを終え、器材等の搬出を行ない、すべての調査を完了した。

Ⅲ 層 序

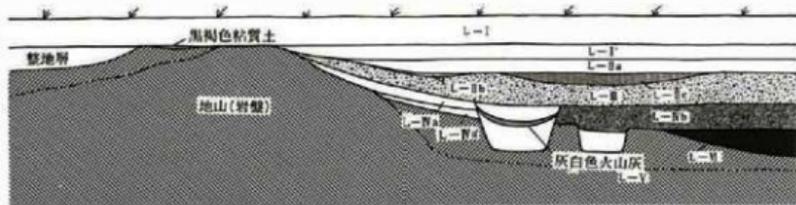
調査区は西半部が微高地、東半部が低湿地となっている。また、中央部の北側にはかつて大臣宮の丘陵の南端部がのびていたが現在では削平されている。西半部では南西隅に一部整地層がみられやや中央寄りの地点には暗褐色粘質土が自然堆積しているが、大部分は現在の水田層の下がすぐ地山である砂層となっている。一方、東半部は東側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区北東隅は亜泥炭層（スクモ層）となっている。この層の上には古代から中世にかけての堆積層が4層見られる。しかし、これらの層の分布範囲は東半部に限られるので、西半部の遺構との層位的な関係は把握できない。

以下、層序模式図により説明する。

第Ⅰ層 現代の水田床土である。厚さ0.25～0.20mで調査区全体におよんでいる。第Ⅰ層はこれより古い水田床土であるが、大臣宮の丘陵削平後の層であることから第Ⅰ層と同様現代の層と見られる。

第Ⅱa層 粘性があり、マンガンを多量に含む層である。西側の微高地に近いところからは古代から中世にかけての土器が出土している。この層の底面は凹凸があり、水田層の可能性が高い。厚さ0.20～0.05mで調査区全体に認められる。

- 第 IIb 層 炭化物、焼土粒、土器細片などを含む層である。西側の微高地に近い狭い範囲にのみ堆積している
- 第 IIc 層 調査区東半部の内、南壁付近に部分的に認められる層である。南壁トレンチのみでみると SD554 溝跡の範囲とほぼ一致することから、SD554 溝跡埋没後に生じた自然のくぼみに堆積した土層かと考えられる。
- 第 III 層 やや粘性のある褐灰色土でマンガンや炭化物を含んでいる。西側の微高地に近い範囲からは中世の土器が出土している。厚さ0.25~0.15mで調査区全体に堆積している。
- 第 IVa 層 西半部の微高地から東半部へかけての緩やかな斜面に堆積している。厚さ0.20~0.00mの薄い層である。
- 第 IVa' 層 北壁トレンチでのみ確認できた層で、第 IVa 層におおわれている。分布範囲を平面的に把握することができなかったが一応堆積層として扱った層である。
- 第 IVb 層 調査区北東隅に堆積しているもので、SD554 溝跡より西側には及んでいない。黒色で粘性があり、厚さは0.20mである。この層の上面は凹凸が著しく、10世紀前半に降下した灰白色火山灰がブロック状に堆積している。平安時代の水田層と見られる。
- 第 V 層 調査区北東隅に堆積している亜泥炭層（スクモ層）である。遺物は全く含んでいない。調査区北壁トレンチでは東壁から約20m 西側から認められ、東側になるほど厚くなっており、調査区北東壁では厚さ約2.5m以上にもなっている。
- 第 VI 層 地山の砂質土層である。自然堤防の一部と見られる。
- 整地層 調査区南西隅にのみ見られる層である。断り割り調査を行っていないため詳細は不明であるが、この層を掘り込んだ遺構の断面で観察すると黒褐色土と黄褐色土が互層になっている状況が見られる。
- 黒褐色土
粘質土 調査区西半部の内、やや中央部に近い地点において南北約13m、東西約7mの範囲に分布している。不整形の浅いくぼみに堆積した層と見られる。多賀城政庁第Ⅲ期（780~869年）の平瓦が出土している。



第5図 層序模式図



E 32 E 36 E 44 E 50 E 56 E 62 E 68 E 74 E 80 E 86 E 92 E 98 E 104



第6図 遺構全体図



IV 発見した遺構と遺物

今回の調査において掘立柱建物跡12棟、溝跡13条、土壇約30基、その他数多くの小柱穴などを発見した。以下、それらの概要と出土した遺物について述べ、次に遺構外から出土した遺物について簡単に説明する。

1. 掘立柱建物跡

調査区西半部において12棟発見した。この内、西壁に近い地点で9棟、西半部の内やや中央部に近い地点で3棟重複している。調査区の制約上建物の全体を検出できたものは2棟のみである。また、建物跡としてまとまらない柱穴も多く発見しているため、実際はもっと多くの建物が存在したことが推定できる。なお、柱穴の断ち割りとはほとんど行っていないため細部については明らかにできなかったところが多い。

今回の調査で発見した建物跡には柱の抜き取り穴や切り取り穴によって柱位置の明確でないものが多い。それらについては柱穴の中心に柱位置を想定し、柱間を推定した。但し、抜き取り穴や切り取り穴の位置からおおよそ柱位置を推定できるものについてはそれらの中心に柱位置を想定したものもある。柱間の記載にあたっては柱痕跡を確認できたものは1m以下3桁目を四捨五入し2桁目までの数値を示した(例:〇〇.〇m)。柱痕跡を確認していないものについては1m以下2桁目を四捨五入し、1桁目までの数値を示した(例:約〇.〇m)。方向については基本的に側柱列で計測した。両端の柱穴の柱痕跡を確認できた場合、30秒以下は切り捨て30秒以上を切り上げた数値を示した(例:〇度〇分)。両端の柱穴の片方でしか柱痕跡を確認できず少ない柱間で計測せねばならない場合、或は柱痕跡を確認できなかった場合は柱穴の中心に柱位置を想定して計測し、30分以下は切り捨て、31分以上は切り上げた数値を示した(例:約〇度)。

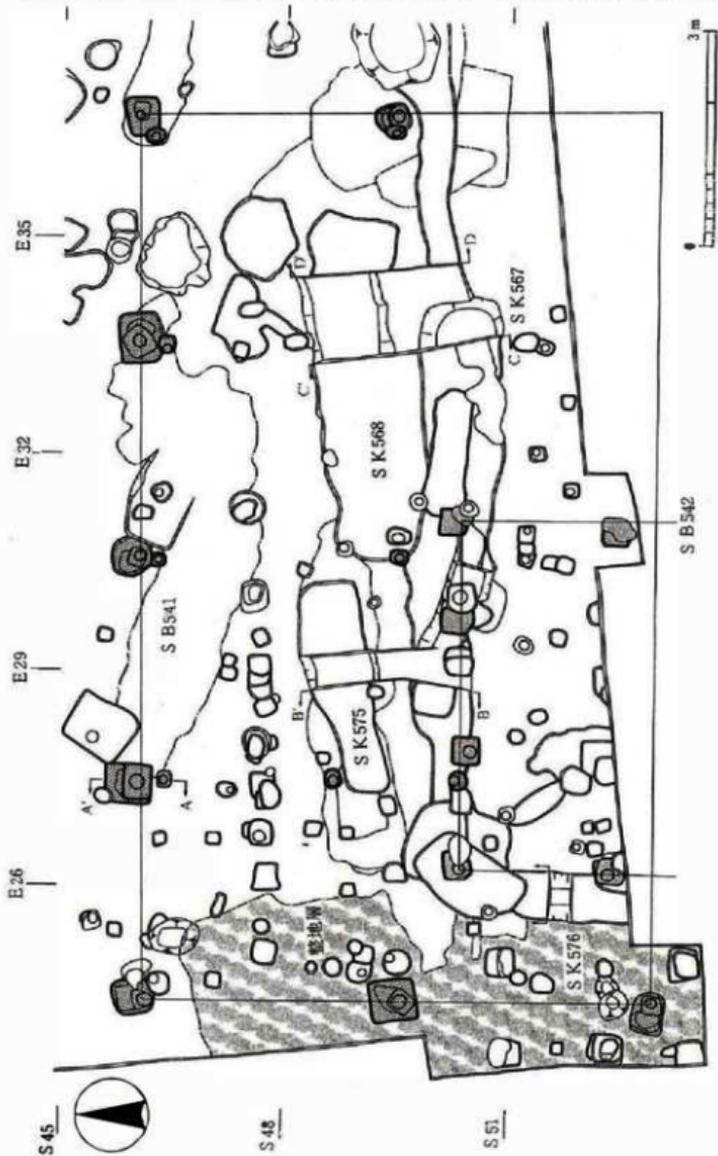
(1) SB 541建物跡

東西4間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。調査区南西隅の整地層上面及び地山上で発見した。両側柱列については西端の柱穴を発見したのみであるが北側柱列の柱穴はすべて検出した。本建物跡はほぼ同位置で2時期重複していることを確認しており、A期(古段階)の柱穴の掘り方、その抜き穴、B期(新段階)の柱穴の掘り方の平面プランを把えており、B期のすべての柱穴で柱痕跡を確認している。SB 542・549建物跡、SK 567・568・575・576・591土壇、SD 590溝跡などと重複しており、SK 568土壇より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。なお、B期には床束 および間仕切と考えられる小柱穴を伴っている。いずれの時期の柱穴からも遺物は出土していない。

以下、古い順に説明する。

SB 541A

柱位置を想定できる柱穴がないので、この時期における本建物跡の方向、及び柱間などは不



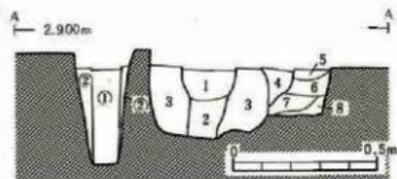
第7図 SB 541・542遺物跡 S K 567・568・575・576土城

明である。しかし、B期の柱痕跡のほとんどが本時期の柱穴のほぼ中央に位置することから、方向及び柱間はB期と概ね同じであった可能性が高い。柱穴の平面形は方形のものが多く、規模は北側柱列西妻より1間目でみると長辺0.64m、短辺0.55m、深さ0.23mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。掘り方埋土は浅黄色砂質土、褐灰色粘質土、黄灰色粘質土が粗く互層になっている。

SB541B

この時期における本建物跡の方向は、北側柱列でみると発掘基準線と一致している(注)。桁行については総長12.26m、柱間は西より3.03m、3.14m、2.95m、3.14mである。梁行については、西妻で総長6.78m、柱間は南より3.40m、3.39mである。東妻は北より1間分の柱間が3.46mである。柱穴の平面形は方形のものが多く、規模は、北側柱列西妻より1間目でみると長辺0.50m、短辺0.40m、深さ0.31mである。平面的にはA期より小規模であるが、底面はやや深く掘り込まれ、壁はほぼ垂直である。掘り方埋土は浅黄色砂質土の単層である。

ところで、本建物跡は、棟通り下で東妻より2間目の梁行柱筋上に1個、また西妻より1間目の梁行柱筋上に2個検出しており、床張りで西妻より1間目に間仕切りを設けたものと考えられる。間仕切りと見られる小柱穴は棟通りで折り返した際、対称の位置にある。また、北側柱穴や東妻柱穴を切る床東柱穴と同じ大きさの小柱穴を検出した。この内、北東隅柱穴を切るものは南西隅柱穴との対角線上に、その他のものはそれぞれ梁行柱筋上或は棟通りに位置している。このことから、これらの小柱穴も棟通り下小柱穴と一連の床東柱穴と見ることができる。これらの床東柱穴ではすべて柱痕跡を確認している。間仕切りの中央間は1.60m、床東と側柱の間は2.64mである。東妻棟通り下の柱穴ではB期掘り方を切っている状況を確認していることから、側柱や妻柱を立て柱穴を埋めた後、各側柱の内側及び棟通りに再度小柱穴を掘り床東を立てるといふ工程を推定することができる。規模は長辺0.25m、短辺0.19m、深さ0.38mである。柱痕跡は径0.15mの円形である。他の床東柱穴については深さは不明であるが、平面形及び規模は概ね同様である。



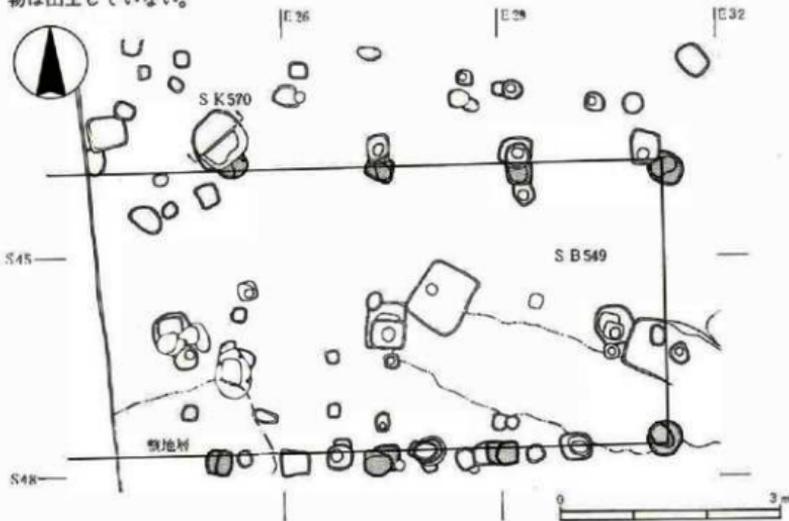
- 1・2 B期 柱痕跡
- 3 B期 掘り方埋土
- 4 A期 抜き穴
- 5～8 A期 掘り方埋土
- ① B期 床東柱痕跡
- ② B期 床東掘り方埋土

第8図 SB541建物跡 北側柱列西より1間目柱穴断面図

(注) 北側柱列の内、東妻より3間目までの柱痕跡はすべて直線上に並んでいるが、西妻のみ市側にずれている。そのため、ここでは東妻より3間目までの計測値を示した。

(2) SB549建物跡

東西4間以上、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。調査区西端部の整地層上および地山上で発見した。東妻でみると梁行を1間としているため北側柱列西端の柱穴を西妻と捉えるのは難しい。SB544・541建物跡と重複しており、SB544建物跡より古い。SB541建物跡との関係は不明である。本建物跡の柱穴にはすべて抜き穴が伴っているため柱位置は不明である。柱穴の中心に柱位置を想定して方向をみると、概ね発掘基準線に沿っている。桁材については南側柱列で総長約6.2m以上、柱間は南側柱列で西より約2.3m、約1.5m、約2.4m、北側柱列で総長約7.9m以上、柱間は西より約1.9m、約2.1m、約1.9m、約2.1mである。梁行については東妻が約3.7mである。柱穴の平面形は方形のものと円形のものがあり、規模は前者が長辺0.36m、短辺0.32m、後者は径約0.47mである。埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。



第9図 SB549建物跡・SK570土坑

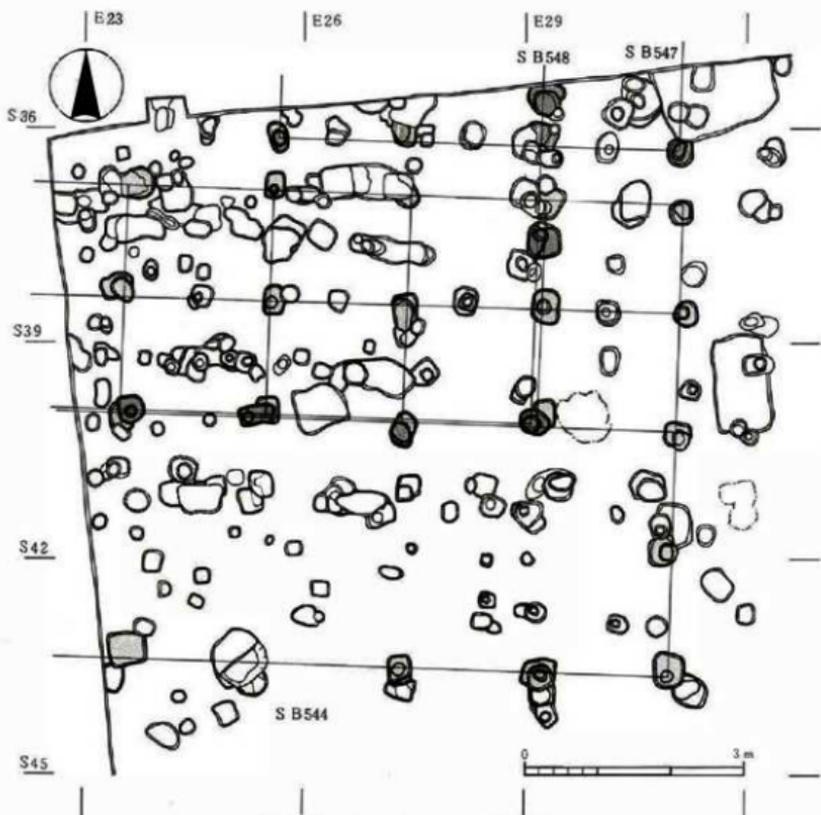
(3) SB542建物跡

調査区南西隅の地山上で発見した掘立柱建物跡である。東西3間、南北1間分検出したにすぎないが、それらを北側柱列と東妻、西妻の一部と見て東西棟を想定しておきたい。東妻柱穴及び東妻より1間目柱穴には抜き穴があるが、他の柱穴では柱痕跡を確認している。SB541建物跡、SK567・589土坑と重複しており、SK589土坑より古いが、SK567土坑より新しい。SB541建物跡との関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列で見るとほぼ発掘基準線

に沿っている。桁行については総長約4.2m、柱間は西より1.62m、約1.6m、約1.2mである。梁行柱間については西妻の北より1間分が2.01m、東妻の北より1間分が約1.9mである。柱穴の平面形は概ね正方形であり、規模は一辺0.40mである。柱は柱痕跡より径0.18mである。柱穴埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(4) S B544建物跡

東西4間以上、南北4間の東西棟掘立柱建物跡である。調査区北西隅の地山上で発見した。棟通り及び横通りと北側柱列の間にも桁行柱筋と梁行柱筋の交点に柱を持つものである。本建物跡の柱穴は抜き穴を伴っていたり、他の建物の柱穴で破壊されているものがあり、柱位置が不明なものが多い。西妻は調査区外にのびており、南側柱列東妻から3間目はSK 570土壌で破壊されている。また、S B543・545・546・548・549建物跡と重複しており、S B545・



第10図 S B544・547・548建物跡

546・548建物跡より古く、S B 549建物跡より新しい。S B 543・547建物跡との関係は不明である。本建物跡の方向は、北東隅をのぞいた東妻でみると北で2度30分東に偏している。南北両側柱列でも柱穴の中心に柱位置を想定して計測するといずれも東で約2度30分南に偏した数値が得られる。桁行については、南側柱列で総長約7.4m以上、柱間は東妻より1間目が1.74m、1間目と2間目の間が1.94mである。梁行については東妻で総長約6.4m、柱間は南より約1.7m、約1.6m、約1.7m（3間分で5.02m）、約1.4mである。柱穴の平面形は隅丸方形のものや円形に近いものなどがある。規模も一様でなく、前者の中にも長辺0.48m、短辺0.38mのものから長辺0.35m、短辺0.26mのものまでである。柱は柱痕跡より径0.22~0.12mである。埋土は黒褐色土を多く含む黄褐色土で粗砂を含んでいるものが多い。なお、本建物跡の構造については、柱痕跡を検出している柱穴が少ないため、建物内部に位置する柱穴がどのような役割を持っているのか明らかにできなかった。遺物は出土していない。

(5) S B 546建物跡

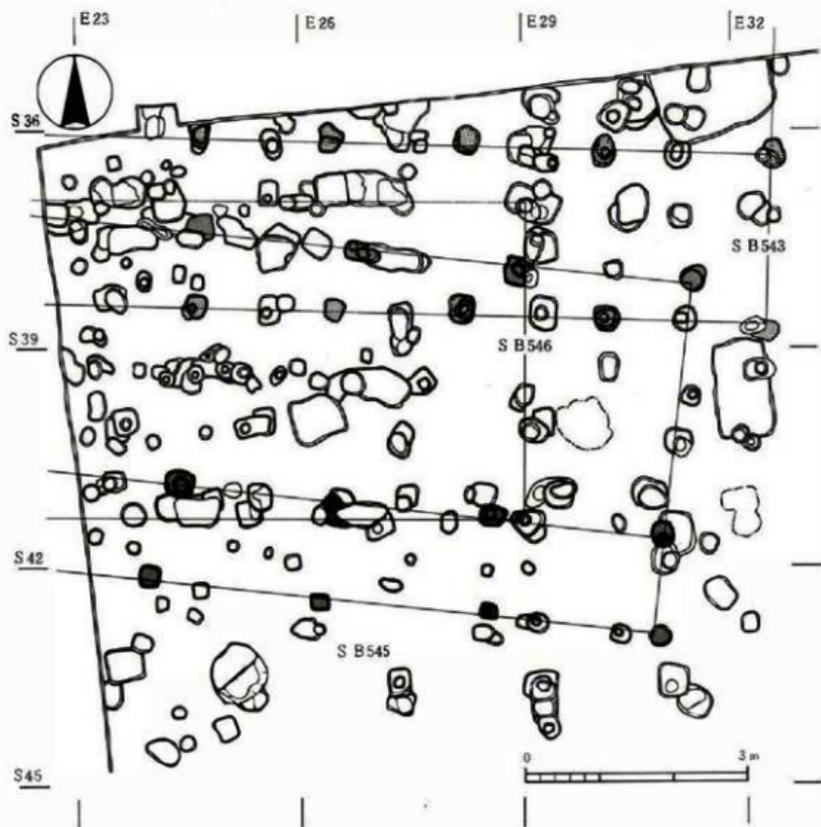
東西2間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。調査区北西隅の地山上で発見した。S B 544・545・543・548建物跡と重複しており、S B 544・549建物跡より新しいがS B 545建物跡より古い。S B 548建物跡との関係は不明である。本建物跡の方向は、東妻でみると北で1度21分東に偏している。桁行については、北側柱列で総長約4.9m以上、柱間は西より約2.2m、約2.7m、南側柱列で総長約4.8m以上、柱間は西より約2.3m、約2.5mである。梁行については東妻で4.25mである。柱穴の平面形は隅丸方形のものがほとんどで、規模は最大で長辺0.56m、短辺0.46m、最小で長辺0.42m、短辺0.38mである。柱は柱痕跡より径0.18mである。柱穴埋土は褐色土を含む黄褐色土で10世紀前半の灰白色火山灰粒が混入しているものもある。遺物は出土していない。

(6) S B 548建物跡

東西4間以上、南北3間以上の掘立柱建物跡である。調査区北西隅の地山上で発見した。S B 543・544・545・547・546建物跡と重複しており、S B 544・549建物跡より新しいが他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で約1度南に偏しており東妻でみると北で約3度東に偏している。桁行については、南側柱列で総長約5.5m以上、柱間は西より1.63m、約2.1m、約1.8mである。梁行については総長約4.5m以上、柱間は南より約2.6m、約1.9mである。柱穴の平面形は隅丸方形、楕円形のものなどがあり、前者は長辺0.50m、短辺0.28mのものや長辺0.42m、短辺0.36mのものなどがある。柱は柱痕跡より径0.18~0.16mである。柱穴の埋土は黒褐色土や褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(7) S B545建物跡

東西3間以上、南北2間の南面喰付東西棟掘立柱建物跡である。調査区北西隅の地山上で発見した。東妻から3間目の桁の柱穴が西側にかなり寄っているため本建物跡は東西4間以上になる可能性が高い。S B544・546・543・548建物跡と重複しておりS B544・546建物跡より新しい。S B545・543建物跡との関係は不明である。本建物跡の方向は、南入側柱列(身舎南側柱列)でみると東で6度28分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長約6.7m以上、柱間は西より約2.2m、2.13m、約2.4m、南側柱列で総長約7.0m以上、柱間は西より約2.3m、約2.3m、約2.4m、南入側柱列で総長6.56m以上、柱間は西より2.08m、2.12m、2.36mである。梁行については、東妻で総長約4.8m、柱間は南より約1.3m、約3.5mである。柱穴の平面形は隅丸方形、方形、円形などである。規模は、身舎柱穴で0.4m四方のものが最も大きく、



第11図 S B543・545・546建物跡

長辺0.30m、短辺0.25mのものが最も小さい。柱は、柱痕跡より身舎部分で径0.20~0.16m、礎部分で径0.12mである。埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(8) S B543建物跡

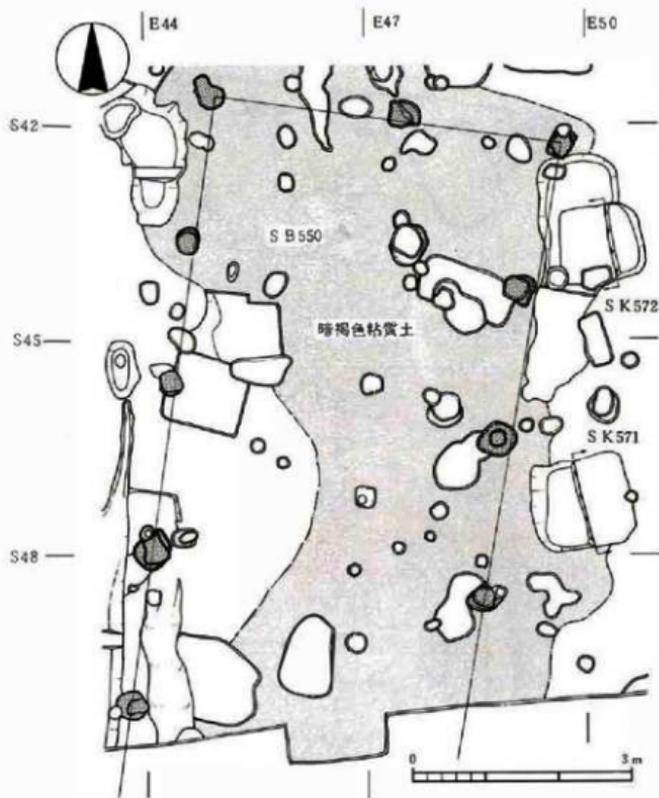
調査区北西隅で発見した掘立柱建物跡である。東西4間、南北1間分発見したにすぎないが東西4間、南北1間の細長い建物であるか、或は北側にのびる建物の南側の一部であるのか明らかでない。今回の調査区を含め、周辺の調査で梁行が3mに未たない建物跡は未発見であるため、ここでは一応後者の可能性をとり、東西棟を想定しておきたい。本建物跡の柱穴は抜き穴を伴っているものが多いが、東妻より1間目の柱穴では抜き穴を掘り下げ、その底面で柱痕跡を検出していることから、柱の周囲を掘りくぼめ柱を切断したものであることが知られる。本建物跡の方向は、南東隅柱穴をのぞく南側柱列でみると東で1度26分南に偏している。桁行については、南側柱列で総長約7.6m、柱間は西より3.70m（2間分）、1.92m、約2.0mである。梁行については、西妻1間分の柱間が約2.4mである。柱穴の平面形は隅丸方形のものが多く、規模は長辺0.40m、短辺0.30mのものから長辺0.30m、短辺0.25mのものまでである。柱は、柱痕跡より径0.12mである。柱穴埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(9) S B547建物跡

調査区北西隅北壁際の地山上で発見した。東西方向に3間分検出したにすぎないが、北側にのびる東西棟の一部と捉えておきたい。両端の柱穴で柱痕跡を検出している。S B543・548建物跡と重複しているが新旧関係はいずれのものとも不明である。本建物跡の方向は、東で1度2分南に偏している。桁行については総長5.53m、柱間は西より約1.7m、約1.7m、約2.1mである。柱穴の平面形は隅丸方形と楕円形のものがあり、規模は前者が長辺0.42m、短辺0.32m、後者が長径0.44m、短径0.26mである。柱は柱痕跡より径0.19mである。柱穴埋土は黒褐色土を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(10) S B550建物跡

南北5間以上、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。調査区西半部の内、やや中央寄りの暗褐色粘質土及び地山上で発見した。南妻は調査区外へのびている。S B551建物跡、S D577溝跡、S K569・565土壇と重複しており、S B551建物跡との新旧関係は不明であるが、他のものよりは新しい。すべての柱穴に抜き取り穴があり、柱位置がわかるものはない。柱穴の中心に柱位置を想定すると本建物跡の方向は、北で約8度東に偏している。桁行については西側柱列で総長約8.5m以上、柱間は北より約2.0m、約2.0m、約2.3m、東側柱列の柱間は北より約2.1m、約2.1m、約2.2mである。梁行については北妻で総長約4.9m、柱間は西より約2.6

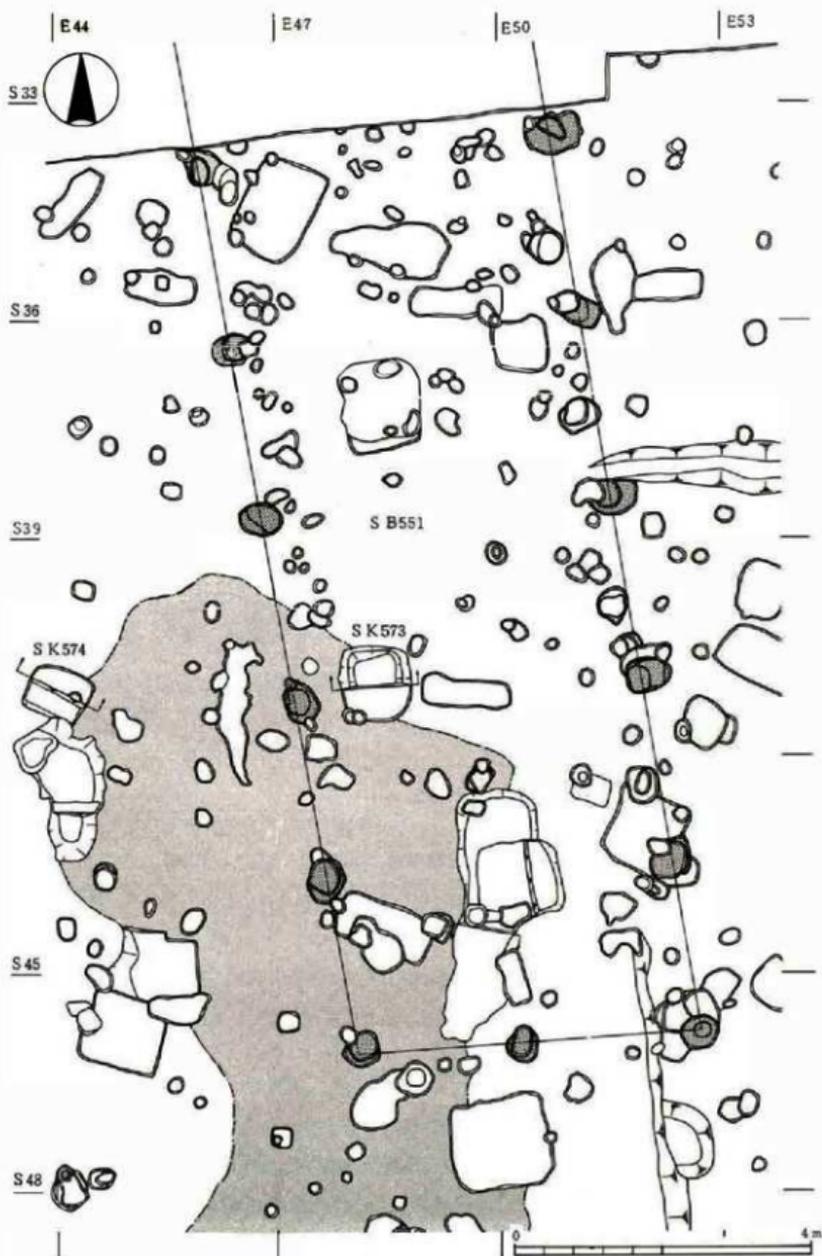


第12図 S B 550建物跡、S K 571・572・578土坑

m、約2.2mである。柱穴の平面形は方形に近いものと円形に近いものがあり、不整形なものが多い。西側柱列北妻から3間目の柱穴及び東側柱列北妻から2間目の柱穴は本建物跡の中では規模の大きいものであり、平面形が前者のタイプで長辺0.48m、短辺0.44mである。柱穴埋土はやや粘性のある褐色土である。抜き穴埋土も褐色土で10世紀前半の灰白色火山灰小ブロックや土器の細片を多く含んでいる。

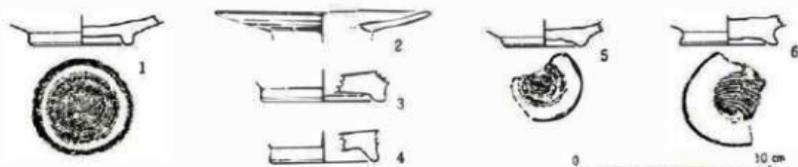
(II) S B 551建物跡

南北6間以上、南西2間の南北棟掘立柱建物跡である。調査区西半部の内、やや中央寄りの暗褐色粘質土及び地山上で発見した。北妻は調査区外へのびている。S B 550・552建物跡、S K 565・572・573土坑などと重複しているがいずれのものとも新旧関係は不明である。すべての柱穴に抜き取り穴があり柱位置がわかるものはない。柱穴の中心に柱位置を想定すると、本



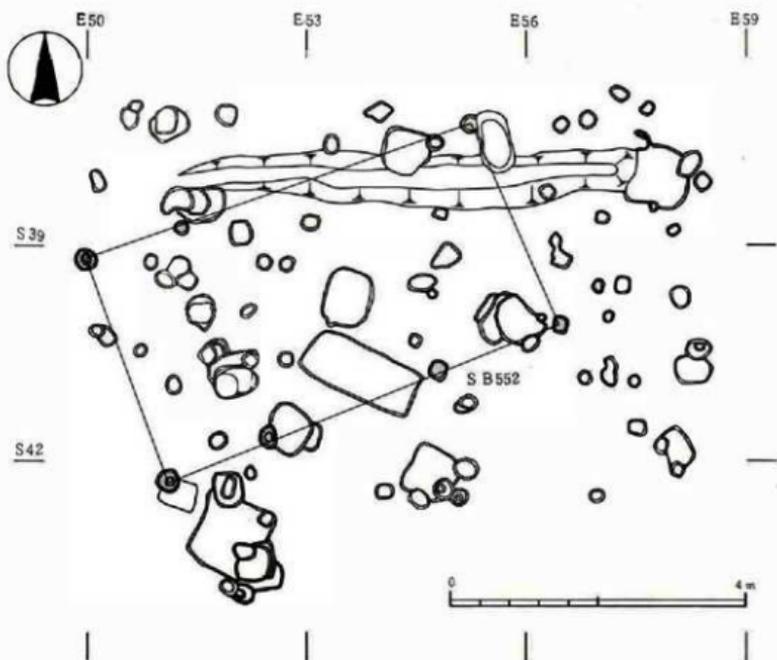
第13図 S B551建物跡、S K573・574土坑

建物の方向は、東側柱列で北で約5度西に偏している。桁行については、東側柱列で総長約12.3m以上、柱間は南より約2.4m、約2.5m、約2.5m、約2.5m、約2.5mである。梁行につ



番号	種別	柱穴・竪	外面の割型	内面の割型	底面	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
1	赤焼き土器 高台(杯・皿)	ピット54	ロクロナゲ	ロクロナゲ	未切り		5.4cm		R-129	
2	赤焼き土器 高台(皿)	ピット142 柱穴	ロクロナゲ	ロクロナゲ		(11.5)cm			R-135	
3	赤焼き土器 高台(杯・皿)	ピット57	ロクロナゲ	ロクロナゲ	未切り		(3.5)cm		R-133	
4	赤焼き土器 高台(杯・皿)	ピット48 柱穴	ロクロナゲ	ロクロナゲ	未切り		(5.6)cm		R-134	
5	赤焼き土器 高台(杯・皿)	ピット55 柱穴	ロクロナゲ	ロクロナゲ	未切り		(4.2)cm		R-132	
6	赤焼き土器 高台(杯・皿)	ピット52 柱穴	ロクロナゲ	ロクロナゲ	回転未切り		(5.0)cm		R-130	

第14図 S B550・551建物跡出土遺物



第15図 S B552 建物跡

いては、南妻で総長約4.6m、柱間は西より約2.2m、約2.4mである。柱穴の平面形は方形に近いものと円形に近いものがあり、いずれも不整形である。東側柱列南妻より5間目の柱穴は前者で、規模は長辺0.76m、短辺0.50mと本建物跡中最も大きい。南妻の柱穴は比較的小規模であり、南東隅の柱穴は平面形が歪んだ円形で長径0.52m、短径0.45mである。埋土は黄褐色土を主体とするものが多い。抜き穴から土器の細片が多く出土している。

(12) SB552建物跡

東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。調査区西半部の内、やや中央寄りの地山上で発見した。北側柱列の東妻から1間目の柱穴が後世の溝で破壊されているが、他の柱穴はすべて検出し、その内3個の柱穴で柱痕跡も確認している。SB551建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で約22度北に偏しており、西妻でみると北で20度31分西に偏している。桁行については、北側柱列で総長約5.6m、柱間は西より約1.4m、約4.2m（2間分）、南側柱列で総長約5.8m、柱間は西より1.48m、約2.5m約1.8mである。梁行については西妻が3.30m、東妻が約3.0mである。柱穴は平面形が円形のものや方形のものがあり、前者は規模が径約0.30m、後者は一辺約0.25mである。柱は柱痕跡より径0.14mである。遺物は出土していない。

2. 溝跡

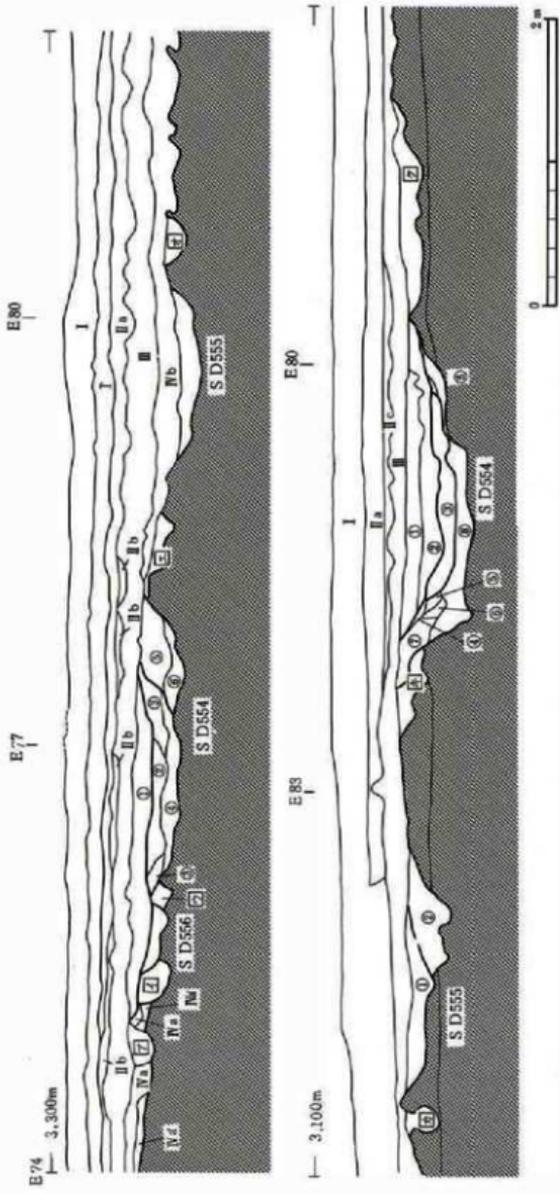
調査区東半部において8条、西半部において5条発見した。この内、東半部において発見した8条の溝は、すべて南北溝である。微高地と低湿地の境界に位置するところから同様の性格を持った一種の区画溝と考えられる。調査区全体にわたって平面的に検出してはいないが、部分的にトレンチを入れ、重複関係や埋土の状況を把握した。以下、東半部で発見した溝跡を中心に説明する。

(1) SD555溝跡

調査区東半部で発見した溝跡の内、最も東側に位置する南北溝である。地山である第VI層から掘り込んでおり第IVb層におおわれている。調査区北壁付近において、わずかに3m平面的に把握しているが、あとは小規模な4つのトレンチで部分的に確認したにすぎない。本溝跡の方向は、No.2トレンチ～No.1トレンチ間では北で約4度東に傾いているが、No.1トレンチ～No.4トレンチ間では逆に北で約19度西に傾いており、No.5トレンチから南側は概ね発掘基準線に沿っている。規模は、北壁トレンチでみると上幅1.60m、下幅0.90m、深さ0.25mであるが、No.4トレンチでは上幅1.70mであり、南壁トレンチでは上幅1.30m、下幅0.60m、深さ0.20mと一定でない。埋土は黒色の粘質土である。遺物は出土していない。

(2) SD554溝跡

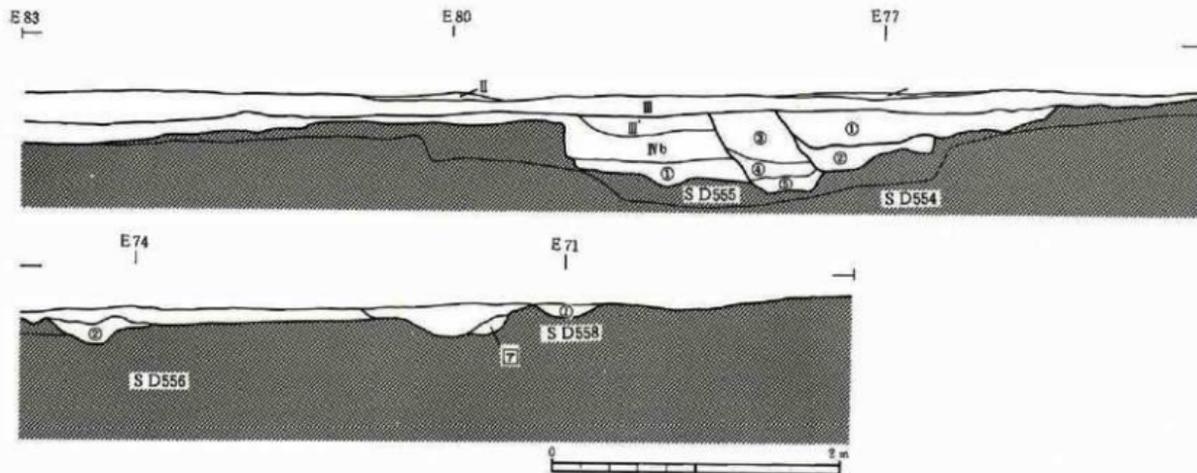
調査区東半部において、SD555溝跡の西側で発見した南北溝である。第IVb層から掘り込ん



基本資料

層位	土名	土層	層名	層号
1	砂	砂	砂	1
2	砂	砂	砂	2
3	砂	砂	砂	3
4	砂	砂	砂	4
5	砂	砂	砂	5
6	砂	砂	砂	6
7	砂	砂	砂	7
8	砂	砂	砂	8
9	砂	砂	砂	9
10	砂	砂	砂	10
11	砂	砂	砂	11
12	砂	砂	砂	12
13	砂	砂	砂	13
14	砂	砂	砂	14
15	砂	砂	砂	15
16	砂	砂	砂	16
17	砂	砂	砂	17
18	砂	砂	砂	18
19	砂	砂	砂	19
20	砂	砂	砂	20
21	砂	砂	砂	21
22	砂	砂	砂	22
23	砂	砂	砂	23
24	砂	砂	砂	24
25	砂	砂	砂	25
26	砂	砂	砂	26
27	砂	砂	砂	27
28	砂	砂	砂	28
29	砂	砂	砂	29
30	砂	砂	砂	30
31	砂	砂	砂	31
32	砂	砂	砂	32
33	砂	砂	砂	33
34	砂	砂	砂	34
35	砂	砂	砂	35
36	砂	砂	砂	36
37	砂	砂	砂	37
38	砂	砂	砂	38
39	砂	砂	砂	39
40	砂	砂	砂	40
41	砂	砂	砂	41
42	砂	砂	砂	42
43	砂	砂	砂	43
44	砂	砂	砂	44
45	砂	砂	砂	45
46	砂	砂	砂	46
47	砂	砂	砂	47
48	砂	砂	砂	48
49	砂	砂	砂	49
50	砂	砂	砂	50
51	砂	砂	砂	51
52	砂	砂	砂	52
53	砂	砂	砂	53
54	砂	砂	砂	54
55	砂	砂	砂	55
56	砂	砂	砂	56
57	砂	砂	砂	57
58	砂	砂	砂	58
59	砂	砂	砂	59
60	砂	砂	砂	60
61	砂	砂	砂	61
62	砂	砂	砂	62
63	砂	砂	砂	63
64	砂	砂	砂	64
65	砂	砂	砂	65
66	砂	砂	砂	66
67	砂	砂	砂	67
68	砂	砂	砂	68
69	砂	砂	砂	69
70	砂	砂	砂	70
71	砂	砂	砂	71
72	砂	砂	砂	72
73	砂	砂	砂	73
74	砂	砂	砂	74
75	砂	砂	砂	75
76	砂	砂	砂	76
77	砂	砂	砂	77
78	砂	砂	砂	78
79	砂	砂	砂	79
80	砂	砂	砂	80
81	砂	砂	砂	81
82	砂	砂	砂	82
83	砂	砂	砂	83
84	砂	砂	砂	84
85	砂	砂	砂	85
86	砂	砂	砂	86
87	砂	砂	砂	87
88	砂	砂	砂	88
89	砂	砂	砂	89
90	砂	砂	砂	90
91	砂	砂	砂	91
92	砂	砂	砂	92
93	砂	砂	砂	93
94	砂	砂	砂	94
95	砂	砂	砂	95
96	砂	砂	砂	96
97	砂	砂	砂	97
98	砂	砂	砂	98
99	砂	砂	砂	99
100	砂	砂	砂	100

第16図 S D554・555・556層断面図



基本単位

層位	土色	土性、混入物
Ⅱ	黄褐色 (2.5YR)	粘質土、マンガン鉄を多量に混入
Ⅲ	黄褐色 (10YR)	粘質土、マンガン鉄・腐化物をやや多めに混入
Ⅳ	黄褐色 (10YR)	腐化物を多量に混入する
Ⅶa	黒色 (2.5Y)	粘質土、一部 焼山ブロックを混入

S D-554

層位	土色	土性、混入物	備考
①	黄褐色 (2.5Y)	粘質土、マンガン鉄を多量に混入、黄褐色粘土・黒白色火山灰を均等に含む	C期
②	黒色 (2.5Y)	粘土、緑褐色粘土・黒白色火山灰をブロック状に混入	D期
③	黄褐色 (2.5Y)	粘土、腐化物を均等に混入する	A期
④	黒色 (2.5Y)	粘土、黒色粘土をブロック状に多量に混入	
⑤	黄褐色 (2.5Y)	粘質土、黒色粘土をブロック状に多量に混入	

S D-555

層位	土色	土性、混入物
①	黄褐色 (2.5Y)	粘土、黄褐色粘土を多量に混入、黄褐色粘土を均等に含む

S D-556

層位	土色	土性、混入物
①	黄褐色 (2.5Y)	粘質土、腐化物を均等に含む

S D-558

層位	土色	土性、混入物
①	黒色 (10YR 1.7)	粘質土、に少し黄褐色粘土を均等に含む

その他

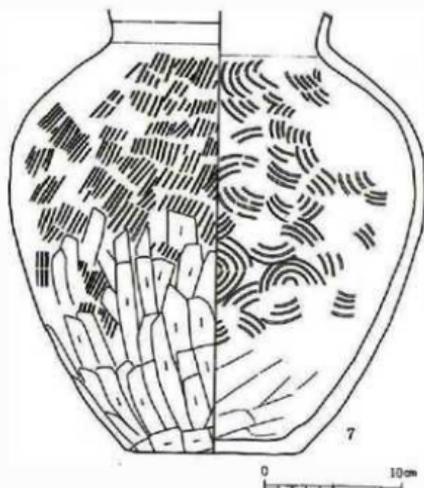
層位	土色	土性、混入物
⑦	に少し黄褐色 (2.5Y)	粘質土、黒色粘質土・黄褐色粘質土を多量に混入する

第17図 S D 554・555・556・558溝跡断面図

であり、第Ⅲ層におおわれている。ほぼ同位置で三時期重複していることを確認している。以下、古い順に説明する。

SD554A

南壁トレンチでみると、断面形は逆台形で規模は、上幅2.60m以上、下幅1.20m、深さ0.50mである。底面はほぼ平坦で西側に幅0.40mの段がついている。埋土は黄灰色や黒色の粘質土で、ほぼ中間に10世紀前半の灰白色火山灰が自然堆積している。遺物は、須恵器甕（第18図7）や平瓦などが出土している。須恵器甕は底面近くから破片の状態でまとまって出土したものである。



第18図 SD554溝跡出土遺物

番号	種別	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
7	須恵器甕	平竹印跡、ヘラケズリ	当て足側（同心円文）	ヘラケズリ		12.6cm		R-04	

SD554B

南壁トレンチでみると、規模は上幅1.45m以上、下幅0.65m、深さ0.25mである。埋土は黒褐色の粘質土で灰白色火山灰ブロックが多く混入している。

SD554C

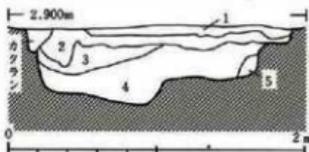
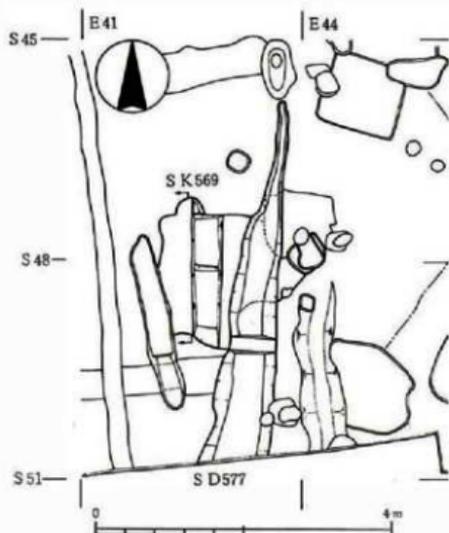
3時期中最も浅く、また最も幅が広い。南壁トレンチでみると、規模は上幅2.27m、下幅0.70m、深さ0.26mである。埋土は黄灰色の砂質土でやや粘性がある。マンガンや酸化鉄が多量に混入している。

(3) SD556溝跡

調査区東半部において、SD554溝跡の西側で発見した南北溝跡である。No4・6トレンチで発見した溝跡は、方向や規模から見て本溝跡と同一のものである可能性が高い。地山上から掘り込んでおり、第Ⅲ層におおわれている。また、SD554溝跡と重複しており、それより古い。規模はNo6トレンチでみると上幅0.85m、No1トレンチの西側でみると上幅0.75m、下幅0.20m、深さ0.20mである。遺物は出土していない。

(4) SD557溝跡

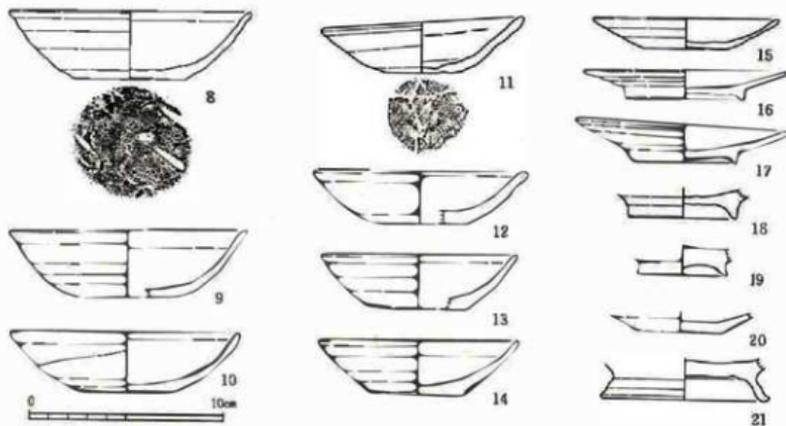
調査区西半部の地山上で発見した南北溝跡である。5.2mにわたって検出しており、更に南



S K569

層位	土色	土性、混入物
1	褐色色 (10Y R 5)	砂質土。やや粘りあり、 マンガンを多量に含む。
2	褐色色 (10Y R 5)	粘質土。褐色色シルトが 多量に混入する。
3	褐色色 (10Y R 5)	砂質土。褐色色シルトを 断続的に若干含む。
4	黒褐色 (10Y R 3)	粘質土。粘性強く、褐色 色シルトを断続的に含む。
5	淡黄色 (2.5Y 7)	砂質土。地山ブロック。

第19図 S D577溝跡、S K569土坑



番号	種別	肩	外側の加飾	内側の加飾	底部	口径	底径	器高	容積No	図版No
8	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	(12.6)cm	(5.2)cm	(3.6)cm	R-16	
9	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	(12.2)cm	(4.6)cm	(3.5)cm	R-24	
10	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	11.8 cm	4.9 cm	3.2 cm	R-12	13-8
11	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	10.4 cm	3.8 cm	2.7 cm	R-13	8-1
12	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	11.0 cm	4.4 cm	2.8 cm	R-14	7-4
13	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	(10.2)cm	(5.1)cm	(2.9)cm	R-15	8-2
14	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	10.4 cm	4.8 cm	2.9 cm	R-45	7-8
15	赤焼き土器 小型杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り	9.6 cm	4.2 cm	1.6 cm	R-17	
16	赤焼き土器 高台小型器	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ		(10.4)cm	(6.0)cm	(1.5)cm	R-19	
17	赤焼き土器 高台小型器	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ		(10.9)cm	5.2 cm	(2.0)cm	R-23	
18	赤焼き土器 高台(杯・蓋)	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り		(5.4)cm		R-104	
19	赤焼き土器 高台(杯・蓋)	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り		(4.6)cm		R-106	13-4
20	赤焼き土器 杯	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り		(4.6)cm		R-108	
21	赤焼き土器 高台(杯・蓋)	f-1	ロクロナデ	ロクロナデ	同径糸切り		(8.6)cm		R-105	13-5

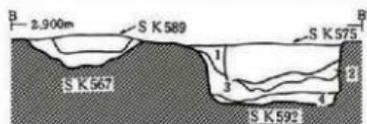
第20図 S D577溝跡出土遺物

側へとびている。S D590溝跡、S K569土坑と重複しており、それらより新しい。幅は調査区南壁付近が最も広く、上幅0.86m、下幅0.55mであるが、北側では上幅0.10m、下幅0.05mとなっている。底面は北側から南側へ向かって傾斜しており、比高差は約0.15mである。

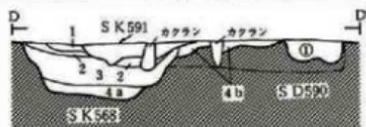
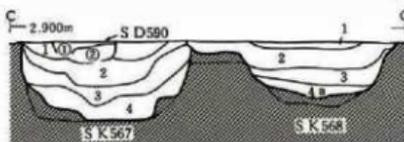
遺物は、赤焼き土器杯(第20図7～13、19)・小型杯(14)・高台小型皿(15)・高台小型杯(16)など完形品を含む多くの資料が出土している。すべて埋土中に散乱した状態で出土している。

3. 土 坑

調査区西半部において約30基発見した。平面的な確認調査にとどめたものが多く、年代や性



層別	土 質	特 徴	見 出 物
S K589 ①	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S D590 ②	黄砂土(1.0V4.0)	溝跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ③	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ④	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑤	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑥	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑦	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑧	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑨	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑩	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑪	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑫	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑬	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑭	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑮	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑯	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑰	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑱	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑲	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ⑳	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉑	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉒	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉓	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉔	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉕	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉖	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉗	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉘	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉙	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉚	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉛	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉜	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉝	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉞	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㉟	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊱	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊲	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊳	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊴	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊵	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊶	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊷	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊸	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊹	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	
S K589 ㊺	黄砂土(1.0V4.0)	層 跡、傾斜した溝跡、ツノの跡、土器の多量に散見する。	

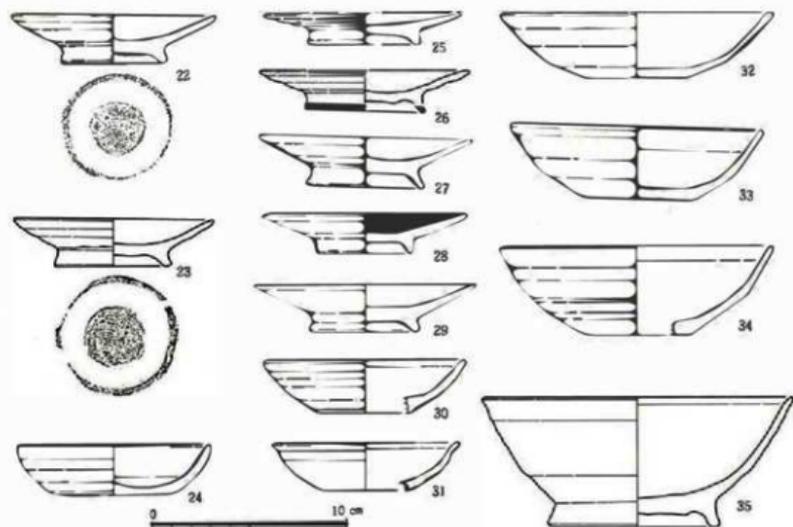


第21図 S K567・568土坑他断面図

番号	遺構名	平面形	規 模		特 徴	備 考
			長径×短径 (虎斑×縦向き)・直径/m	深さ /m		
1	S K565	不整形	3.50×1.10	0.08	土器が多量に出土	半 掘
2	S K566		0.78以上×0.50	—		確認のみ
3	S K567		6.90以上×1.10	0.51		2ヶ所断り割り
4	S K568		6.00×1.90以上	0.42		1ヶ所断り割り
5	S K569		2.00×1.80	0.51		*
6	S K570	円形	0.72	0.38		半 掘
7	S K571	楕円方形	1.40×1.28	0.30		*
8	S K572	*	1.14×1.06	0.32		*
9	S K573	*	1.04×0.96	0.47		*
10	S K574	*	0.84×0.70	0.42		*
11	S K575		3.00×0.90	0.48		1ヶ所断り割り
12	S K576		1.60以上×0.5R	0.25		
13	S K578		1.90×1.10	0.14	土器が多量に出土	表 掘
14	S K579	不整形	1.76×1.42			確認のみ
15	S K580	円形	0.28	0.19		完 掘
16	S K581	楕円形	0.26×0.23			確認のみ
17	S K582	*	0.22×0.17			*
18	S K583	*	0.39×0.28			*
19	S K584					
20	S K585	円形	0.18			確認のみ
21	S K586	楕円形	0.55×0.48			*
22	S K587	*	0.25×0.20			*
23	S K588	不整形	1.70×1.40			*
24	S K589		2.78×0.55	0.30		一部深掘り
25	S K581		1.22×1.16	0.15		

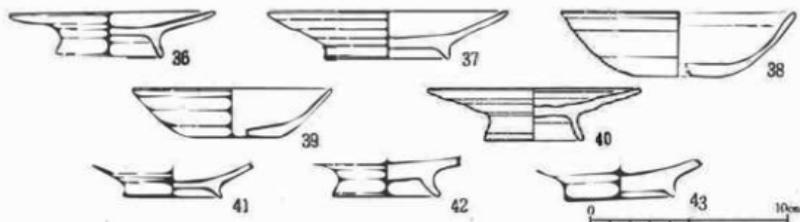
表2 土坑一覧表

格について詳細は不明である。平面形が楕円形のSK575・576・567・568土壇は調査区南西隅において重複、或は隣接している。また、南西隅では不整形の浅い落ち込みがいくつかみられる。これらの内、建物跡と重複しているものはいずれもそれより古い。平面形が隅丸方形のSK571・572・574土壇は調査区西西部の内やや中央部に近い地点で発見した。いずれも遺物は出土していないが、多賀城政庁第Ⅲ期の瓦が出土した暗褐色粘質土を掘り込んでいたため8世紀第3四半紀以降のものとも見ることができる。SK565・578土壇は平面形が不整形の土壇である。SK565はSK572と、SK578はSK574と重複しており両者とも新しい。これらの土壇からは赤焼き土器の杯類が多量に出土している。



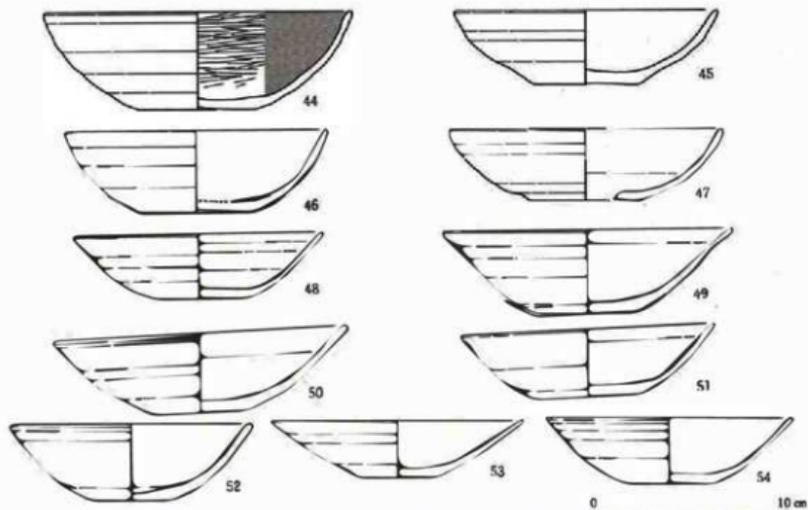
番号	種別	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	高さ	登録No	図版No
22	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	10.5cm	5.5cm	2.5cm	R-6	10-3
23	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	10.4cm	6.0cm	2.5cm	R-9	10-2
24	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(10.0cm)	6.2cm	(2.75cm)	R-7	
25	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	10.2cm	5.7cm	1.7cm	R-1	11-1
26	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(10.8cm)	6.2cm	(2.18cm)	R-2	
27	赤焼き土器 高台杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(11.0cm)	(5.6cm)	(2.65cm)	R-4	
28	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(10.4cm)	(5.0cm)	(2.1cm)	R-18	
29	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(11.4cm)	(5.1cm)	2.5cm	R-5	
30	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(10.4cm)	(4.6cm)	(2.8cm)	R-8	
31	赤焼き土器 小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	(9.6cm)	(4.0cm)	(2.5cm)	R-119	
32	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(14.0cm)	(5.0cm)	(3.4cm)	R-10	
33	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(13.0cm)	(5.6cm)	(3.8cm)	R-3	
34	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	(14.0cm)	(5.3cm)	(4.65cm)	R-112	
35	赤焼き土器 高台大型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	圓錐糸切り	(16.0cm)	(8.4cm)	6.8cm	R-11	7-7

第22図 SK565土壇出土遺物



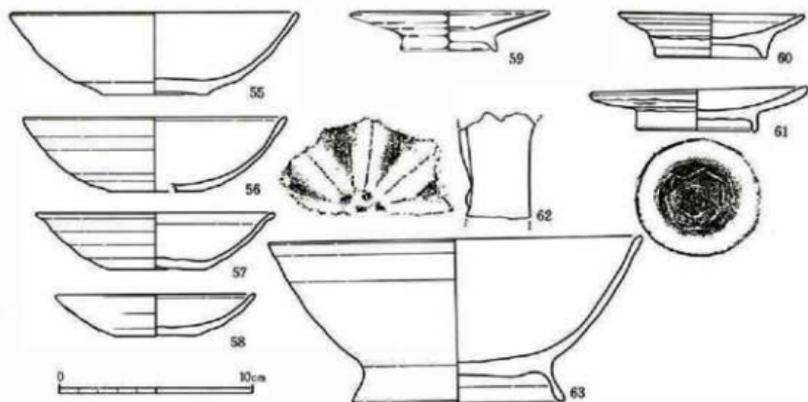
番号	種別	外面の図解	内面の図解	底径	口径	口径	底径	器高	登録No	図版No
36	赤焼き土器 高台小型皿	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	10.7cm	5.6cm	2.3cm		R-27	9-1
37	赤焼き土器 高台小型杯	□□□□ナデ	□□□□ナデ		(12.4cm)	(6.2cm)	(2.5cm)		R-29	
38	赤焼き土器 杯	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(12.0cm)	(4.2cm)	(3.4cm)		R-30	
39	赤焼き土器 杯	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(10.4cm)	(5.0cm)	(2.6cm)		R-26	11-2
40	赤焼き土器 高台小型皿	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(11.0cm)	5.0cm	(2.75cm)		R-28	
41	赤焼き土器 高台付(杯・皿)	□□□□ナデ	□□□□ナデ	糸切り		(5.5cm)			R-116	
42	赤焼き土器 高台付(杯・皿)	□□□□ナデ	□□□□ナデ			(5.1cm)			R-115	
43	赤焼き土器 高台付(杯・皿)	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り		(5.7cm)			R-117	

第23図 SK578土壇出土遺物



番号	種別	遺物名	外面の図解	内面の図解	底径	口径	口径	底径	器高	登録No	図版No
44	土師器 大型杯	SK579	□□□□ナデ	ヘリが丸、脚状	回転糸切り	(16.0cm)	(6.0cm)	(5.1cm)		R-39	
45	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(13.6cm)	5.3cm	3.9cm		R-40	13-1
46	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(13.6cm)	(6.0cm)	(4.4cm)		R-38	
47	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(14.0cm)	(5.8cm)	(3.8cm)		R-41	
48	赤焼き土器 杯	SK580	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(13.0cm)	(4.4cm)	(3.4cm)		R-35	7-2
49	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(15.0cm)	5.0cm	4.4cm		R-37	
50	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(15.2cm)	5.0cm	4.2cm		R-31	7-1
51	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(13.0cm)	5.3cm	(3.6cm)		R-34	7-3
52	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(12.6cm)	4.0cm	4.0cm		R-32	
53	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(13.0cm)	(4.2cm)	(3.0cm)		R-36	
54	赤焼き土器 杯	*	□□□□ナデ	□□□□ナデ	回転糸切り	(12.6cm)	(4.4cm)	(3.5cm)		R-33	7-5

第24図 SK579・580土壇出土遺物

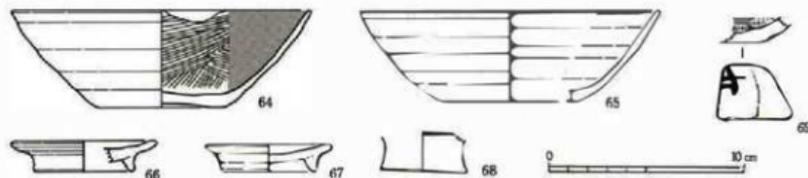


番号	種別	遺積名	外面の調整	内面の調整	底	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
55	赤焼き土器 杯	S K581	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(15.0cm)	(5.4cm)	(4.3cm)	R-111	7-6
56	赤焼き土器 杯	S K582	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(13.8cm)	(4.2cm)	(3.9cm)	R-42	
57	赤焼き土器 杯	S K583	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(12.4cm)	(4.8cm)	(3.0cm)	R-22	
58	赤焼き土器 小型杯	S K584	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(10.4cm)	(4.2cm)	(2.2cm)	R-21	
59	赤焼き土器 高台皿	S K585	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	10.3cm	4.8cm	2.1cm	R-25	10-1
60	赤焼き土器 高台皿	S K586	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(9.5cm)	5.4cm	(2.3cm)	R-20	
61	赤焼き土器 高台皿	S K587	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	11.2cm	5.9cm	2.2cm	R-71	
62	軒丸瓦	S K588							R-79	
63	赤焼き土器 高台大型杯	S K587	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(19.2cm)	10.7cm	8.6cm	R-43	

第25図 S K581~588出土遺物

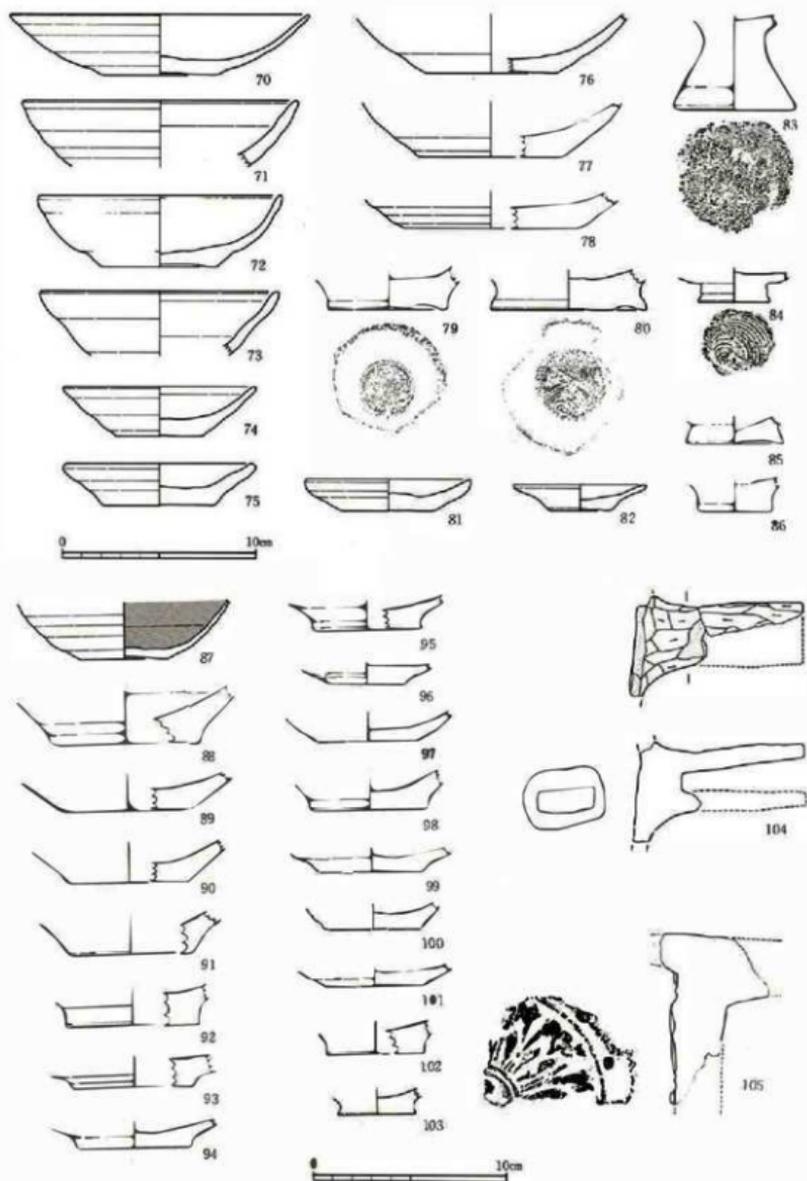
4. 堆積層出土の遺物

I・III・IV層から土師器、須恵器、赤焼き土器などが出土している。第IV層は灰白色火山灰との関係から10世紀前半以前に形成されたものであることが判明している。量は少ないが土師器、須恵器、赤焼き土器などがE80ライン付近から出土している。第III層は第IV層を直接おっている堆積層であり、土師器、赤焼き土器、瓦などが出土している。量的には赤焼き土器が



番号	種別	外面の調整	内面の調整	底	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
64	土師器 杯	ロクロナデ	ヘラミゴキ・泥色処理	回転赤切り	(15.5cm)	(6.4cm)	(5.1cm)	R-78	
65	須恵器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(15.4cm)	(7.0cm)	(4.8cm)	R-49	
66	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(7.6cm)	(5.0cm)	(3.6cm)	R-48	
67	赤焼き土器 高台小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	(6.4cm)	(4.8cm)	(1.5cm)	R-47	
68	赤焼き土器 柱状高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	回転赤切り	—	(4.6cm)	—	R-110	
69	土師器 杯		ヘラミゴキ・泥色処理	回転赤切り(固赤)				R-46	

第26図 第IV層出土遺物

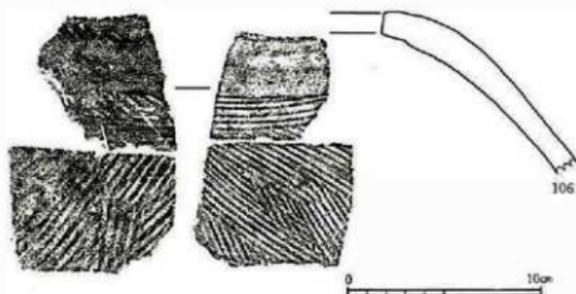


第27図 第五層出土遺物(1)

圧倒的に多い。赤焼き土器の中には柱状高台と呼ばれる中実の高台をもつ皿(或は杯)がある。このような高台をもつ土器はこれまで多賀城跡及びその周辺の遺跡ではあまり知られていないものである。今回の調査では全体の形状を知り得るものはないが第Ⅲ層からは約4個体出土している。

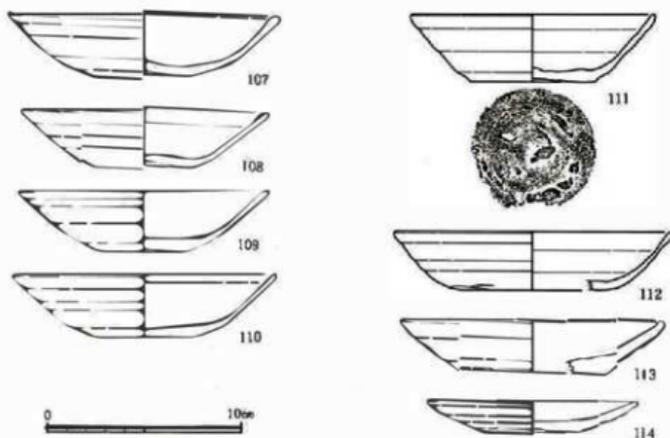
番号	種別	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
70	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	15.4cm	5.8cm	3.2cm	R-55	11-4
71	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ		(14.2cm)			R-92	
72	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(13.0cm)	(6.0cm)	(3.7cm)	R-53	
73	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ		(12.4cm)			R-113	
74	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ		(10.0cm)	4.5cm	(2.6cm)	R-50	
75	赤焼き土器 小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	(10.0cm)	(5.8cm)	(2.2cm)	R-82	
76	土師器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(6.8cm)		R-56	13-2
77	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(7.3cm)		R-102	
78	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(9.0cm)		R-102	
79	赤焼き土器 (杯、皿)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.2cm)		R-114	
80	赤焼き土器 (杯、皿)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(8.0cm)		R-125	
81	赤焼き土器 小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(8.5cm)	(4.6cm)	1.7cm	R-57	
82	赤焼き土器 小型杯	ロクロナデ	ロクロナデ		(6.8cm)	(3.2cm)	(1.4cm)	R-54	
83	赤焼き土器 柱状高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		5.2cm		R-52	12-1
84	赤焼き土器 柱状高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(3.6cm)		R-93	
85	赤焼き土器 柱状高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(5.0cm)		R-97	
86	赤焼き土器 柱状高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(3.7cm)		R-94	
87	土師器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		4.5cm		R-51	
88	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ			(7.6cm)		R-124	
89	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.6cm)		R-89	
90	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.2cm)		R-90	
91	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.4cm)		R-91	
92	赤焼き土器 高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.4cm)		R-99	
93	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(3.1cm)		R-100	
94	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(5.9cm)		R-87	
95	赤焼き土器 高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(5.6cm)		R-95	
96	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		4.0cm		R-101	
97	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(5.2cm)		R-84	
98	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(6.1cm)		R-88	
99	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(5.3cm)		R-83	
100	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		(5.1cm)		R-86	
101	赤焼き土器 杯	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(5.2cm)		R-85	
102	赤焼き土器 高台皿	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(5.0cm)		R-98	
103	赤焼き土器 高台皿	ロクロナデ		回転糸切り		(4.0cm)		R-96	
104	赤焼き土器 (把手)	ケズリ	ナデ					R-59	12-2
105	軒丸瓦							R-80	

表3 第Ⅲ層出土遺物観察表



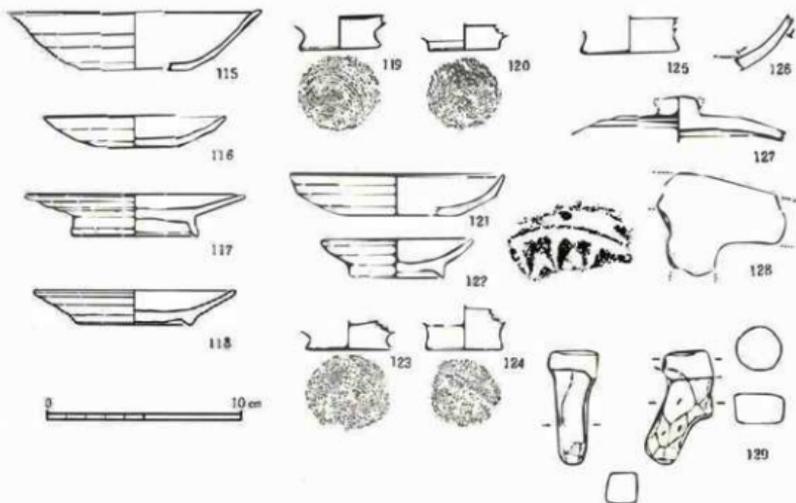
番号：106
 種類：赤焼き土器カマド
 外面の調整：平行印
 ナデ
 内面の調整：ロクロナデ
 ハケメ
 登録№：R-58
 図版№：12-3

第28図 第五層出土遺物(2)



番号	種	別	出土地区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	高さ	登録№	図版№
107	赤焼き土器	鉢	E区高塚トレンチ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(14.0cm)	5.0cm	(3.3cm)	R-76	
108	赤焼き土器	鉢	E区高塚トレンチ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(12.8cm)	(5.0cm)	(3.05cm)	R-75	
109	赤焼き土器	鉢	E区高塚トレンチ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(13.0cm)	(4.7cm)	(3.2cm)	R-74	
110	赤焼き土器	鉢	E区高塚トレンチ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(13.6cm)	(5.0cm)	(3.35cm)	R-77	
111	赤焼き土器	鉢	E区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	(12.8cm)	(6.4cm)	(3.55cm)	R-67	
112	赤焼き土器	鉢	E区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	半縁ヘラケズリ	(14.4cm)	(7.6cm)	(3.3cm)	R-60	
113	赤焼き土器	鉢	4J L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(13.6cm)	(7.4cm)	(2.75cm)	R-62	
114	赤焼き土器	小型鉢	E区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸切り	(10.8cm)	(4.8cm)	(1.65cm)	R-64	

第29図 第一層出土遺物(1)



番号	種別	出土地区、層	外面の刻装	内面の調査	底部	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
115	赤焼き土器 鉢	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(13.0cm)	(5.4cm)	(3.05cm)	R-65	
116	赤焼き土器 鉢	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(9.4cm)	(3.9cm)	(2.7cm)	R-66	
117	赤焼き土器 高台小型皿	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(11.4cm)	6.8cm	(2.2cm)	R-73	
118	赤焼き土器 高台小型皿	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(10.4cm)	5.8cm	(1.8cm)	R-72	
119	赤焼き土器 高台付皿	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切		4.1cm		R-118	
120	赤焼き土器 高台付皿	WE区 遺構埋込部	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切		3.8cm		R-112	
121	赤焼き土器 小型鉢	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(11.0cm)	(9.8cm)	(2.2cm)	R-63	
122	赤焼き土器 高台小型鉢	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切	(7.8cm)	(4.8cm)	(2.15cm)	R-61	
123	赤焼き土器 高台付皿	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転未切		4.4cm		R-120	
124	赤焼き土器 高台付皿	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	?		(5.0cm)		R-121	
125	赤焼き土器 高台付皿	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ	?		(4.0cm)		R-123	
126	陶製瓦器 (肥後産)	WE区 L-1	(透明釉)ロクロナデ 凹転ヘラナズリ	(竹器類)					R-70	12-5
127	黒漆器 (圓)	WE区 L-1	ロクロナデ	ロクロナデ					R-69	
128	柘 瓦	WE区 L-1							R-81	
129	不明土製品	WE区 L-1	手持ちヘラナズリ						R-68	12-4

第30図 第1層他出土遺物(2)

V 考 察

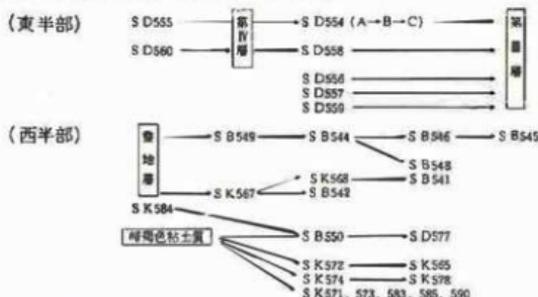
今回発見した遺構は、掘立柱建物跡12棟、溝跡13条、土坑約30基などである。これらの分布状況を見ると、調査区西半部の微高地部分に建物跡や土坑が集中しており、東半部については南北溝8条を発見したのみである。今回の調査は確認調査という性格上、遺構を平面的に把握するにとどめたものが多く、堆積土を掘り下げたものが少ないことから年代の判明した遺構はわずかである。

以下、年代等明らかにできた遺構を中心に簡単な考察を行い、次に多賀城周辺遺跡としての位置づけについて考えてみたい。

(1) 遺構の年代

掘立柱建物跡

建物跡12棟の内、年代を明らかにできたものはS B550・551建物跡の2棟のみである。これらの建物跡は、多賀城政庁第Ⅲ期（780～869年）の平瓦が1点出土した暗褐色粘質土を掘り込んで建設されていることから8世紀第4 四半期以降のものであることは確実である。更に、瓦という遺物の性格を考慮するならば政庁第Ⅳ期（869～10世紀中頃）以降本調査区に持ち込まれた可能性が高いことから、これら2棟の建物については年代の上限を9世紀第3 四半期頃に求めることができよう。また、S B550建物跡については、柱の抜き取り穴に10世紀前半の灰白色火山灰がブロック状に混入している状況を確認していることから（図版4一中）、同建物跡の下限を10世紀前半頃とすることができる。



S B541建物跡は今回の調査で発見した建物跡の内、最も大規模なものである。しかも城外では発見例の極めて少ない床張りの建物であったことも判明している。柱穴の形状も多くが方形を基調としており、柱間も他の建物跡に比べて広いことなどが指摘できるが年代は明らかにできなかった。

溝跡

東半部で発見した溝跡の内、S D555溝跡は地上から掘り込み等Ⅳ層におおわれている溝跡である。第Ⅳ層は上面に10世紀前半の灰白色火山灰が堆積していることから本溝跡の下限年代を10世紀前半とすることができる。本溝跡の堆積土から遺物は全く出土していないため上限年代は明らかでない。第Ⅳ層上から掘り込んでいるS D554溝跡は同位置で3時期の変遷があり、最も古い段階の埋土に灰白色火山灰が自然堆積していることを確認している（図版6一上）。このことから本溝跡は灰白色火山灰が降下した10世紀前半を中心としてその前後に機能していたことが明らかである。S D558・559溝跡及びそれらと一連の溝跡と見られるS D557・556溝跡についてはS D558・559溝跡が第Ⅳa層（第Ⅳb層相当）上から掘り込んでいることからS D555溝跡より古いことは確実である。S D554溝跡との関係は不明である。

S D554～560溝跡はE71～80ラインの間に位置し、地形的に見ると微高地から低湿地に移行する部分にあたる。また本調査区全体の遺構の分布状況についても、S D554～560溝跡等南北溝の西側即ち微高地には建物跡や土坑が数多く分布し、東側の低湿地には遺構が全く見られないなど地形に応じた土地利用を行っている。これらの南北溝は居住域と非居住域とを区画するものであった可能性が高い。

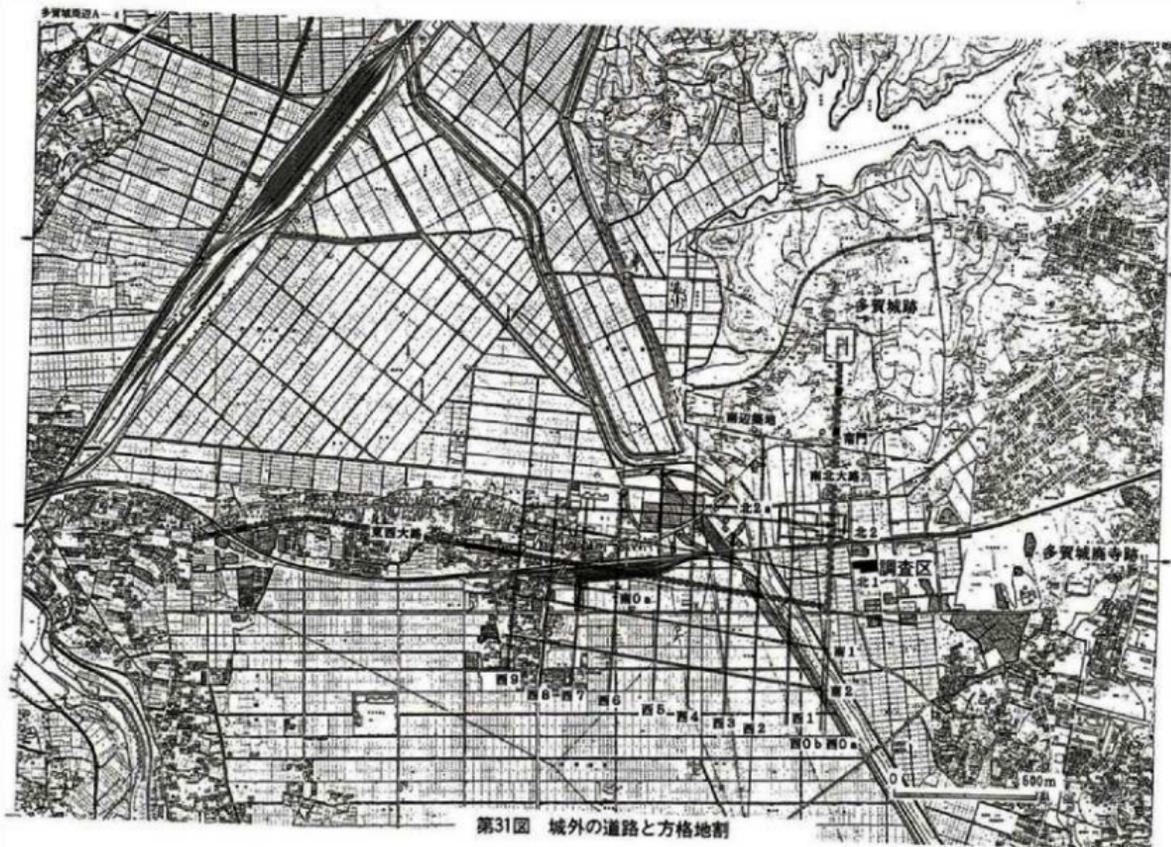
調査区西半部で発見したS D577溝跡はS B550建物跡より新しい溝跡である。同建物跡は10世紀前半以降に廃絶しているため、本溝跡の上限年代を10世紀前半頃とすることができる。本溝跡からは赤焼き土器の杯類が多量に出土している。この中には完形品及びほぼ完全な形のもものが多く見られ、一括して投棄されたような状況を示している。これらの土器は、多賀城跡出土土器の内F群土器と呼ばれているものに類似している。F群土器の年代は、政庁の遺構変遷との関係から10世紀中頃とされている。(註1)。本溝跡についても同様の年代と考えられる。

土 城

平面形が楕円形を基調としたS K567・568土城、隅丸方形を基調としたS K571・572・574土城、不整形のS K565・578土城などがある。この内、S K567・568土城については遺物が全く出土しておらず年代は不明である。平面形が不整形な土城の内、S K565土城はS K572土城より新しく、S K578土城はS K574土城より新しい。S K565・578土城からは赤焼き土器の杯類が多量に出土している。これらの土器はS D577溝跡出土のものと同通性があり、10世紀中頃のものと考えられる。S K571・572・574土城については、S B550建物跡と同様に暗褐色粘質土を掘り込んでいることから上限年代を9世紀第3四半期とすることができる。また、S K572・573土城についてはS K565・578土城より古いことから10世紀中頃を下限とすることができる。S K571土城についても、平面形や埋土の様子がS K572・574土城と類似していることからほぼ同じ頃の年代を考えておきたい。

(2) 多賀城南面における方格地割と本調査区との関係

近年の山王・市川橋遺跡における考古学的調査成果によれば、多賀城の南面一帯には東西・南北道路が規則的に建設されていたことが判明している。これらの道路はそれぞれ南北大路と東西大路を基準として建設されたと考えられ、現在のところ南北道路は南北大路から西へ9条目まで、東西道路は東西大路の北は3条、南は2条目まで確認している。多賀城南面にはこれらの道路によって方格地割が形成され、その区画区からは掘立柱建物跡や井戸跡などが多数発見されており、地盤の悪い敷地をのぞけば基本的に宅地として利用されている。この内、東西大路に面した区画からは10世紀前半の国守館や9世紀後半の庭園をもつ上級官人の邸宅などが発見されている。この大路から離れた区画は比較的小規模な建物で構成された中・下級役人の宅



地と推定され社会的階層に応じて宅地の選定が行われたことも次第に明らかになってきている。今後は区画内における建物や井戸の更に細かなまとまりを把握し、文字通り「まち並み」の実態を追求していく必要がある。

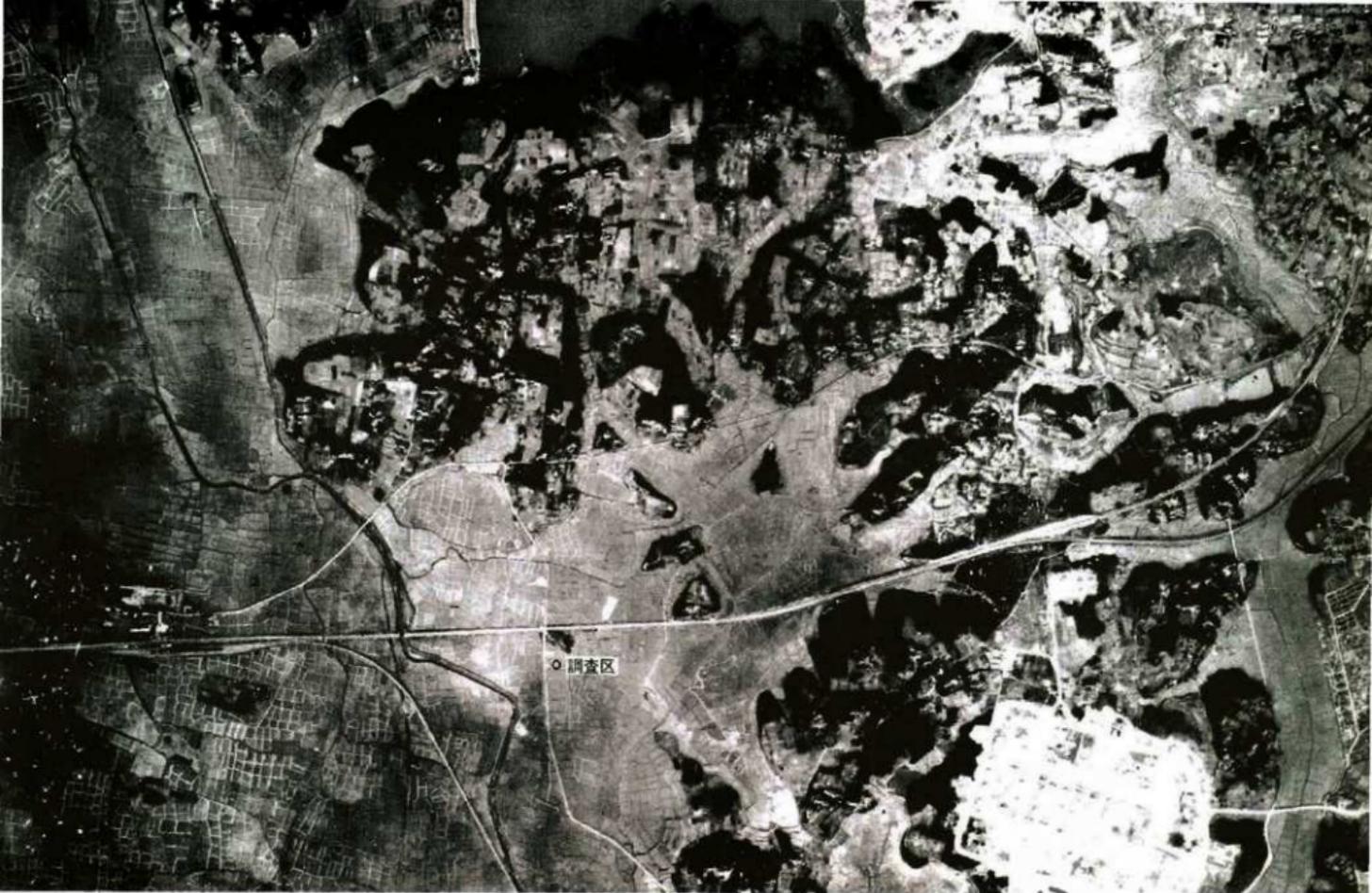
さて、多賀城南面の方格地割は南北大路から西側においてのみ確認されているが東側については現在のところ未確認である。しかし、南北大路の東側にも北1道路がのびていること(註2)、また東西大路の延長線上に東西道路の側溝と見られる東西溝を2地点で発見していること(註3)から、南北大路の東側においても方格地割が存在した可能性は十分に考えられる。ただ、それらはいずれも東西道路に関する情報であり、南北道路に関する資料は全く得られていないのが現状である。

多賀城南面で発見されている南北道路10条の内、最も間隔が狭いのは西2道路と西3道路の間であり、心々距離が98.5~99.9m、逆に最も間隔が広いのが西5道路と西6道路の間で路面心々距離が146.6mというデータが得られている(註4)。このような南北大路の西側一帯の状況を参考にして東1道路を想定すると今回の調査区に現れることが予想される。ところで、これまで城外で発見されている道路はほとんどが両脇に側溝を備えたものであり、東西大路の南側で発見された西0a道路のみが側溝を伴わない盛土による道路と報告されている(註5)。今回の調査区においては側溝を伴った道路及び盛土による道路のいずれも発見することはできなかった。10世紀前半以前の堆積層である第IV層やそれとほぼ同時代の遺構が残存していることから削平を受けて消失した可能性は極めて少ない。ただS D554側溝などの南北溝と、西半部の建物跡や土壌群との間が幅8~7mの南北に長い遺構の空白地帯となっており、南北大路の路面中心からこの空白地帯の中心までの距離が約22mとなっている。このような空白をどのように理解すべきか現時点では解答を持ち得ないが、道路跡の候補として残しておき、隣接地域の調査を通じて明らかにしていきたい。

(3) まとめ

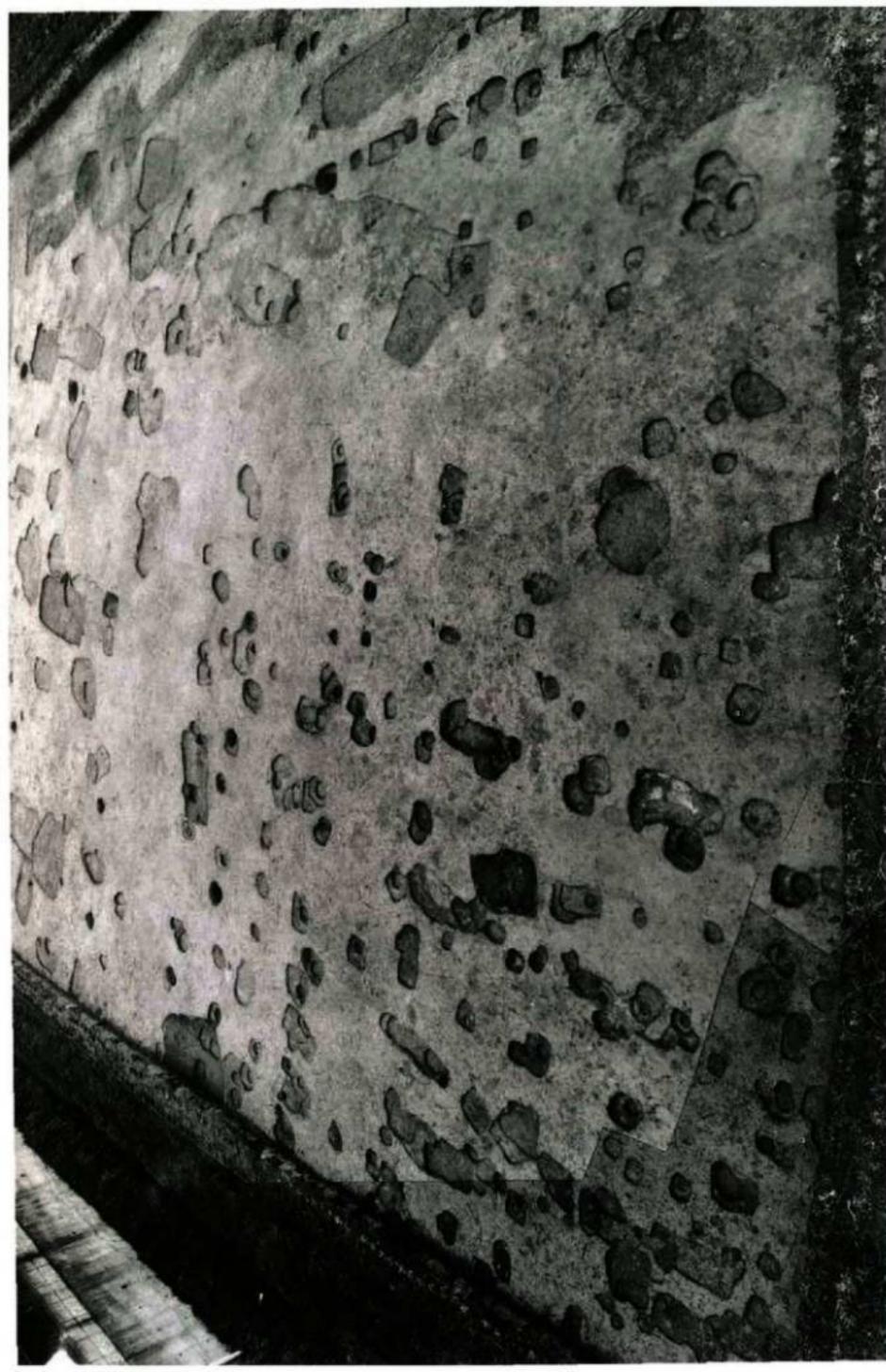
1. 多賀城南門の南方約400m、通称「大臣宮(おとのみや)」と呼ばれる低丘陵の南側隣接地において掘立柱建物跡、溝跡、土壌などを発見した。
2. 調査区東半部は低湿地、西半部は微高地で建物跡や土壌などが密集している。微高地と低湿地は南北溝によって区分されている。
3. 遺構の年代はおおよそ平安時代と考えられる。

- 註 (1) 宮城県多賀城跡調査研究所「第Ⅴ章 考察(2)土器」『多賀城跡 政庁跡本文編』1982
(2) 千葉孝弥「市川橋遺跡第11次調査」『平成5年度宮城県遺跡調査成果発表会(要旨)』1993
(3) 県教委が調査した水入遺跡の東西溝、及び市教委が調査した市川橋遺跡水入地区のS D03・05・07溝は位置的に見て東西道路の側溝の可能性がある。
宮城県教育委員会「多賀城市高崎 水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第24集 1982
多賀城市教育委員会「水入地区発掘調査報告」『市川橋遺跡調査報告書一昭和58年度発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第5集 1984
(4) 千葉孝弥「多賀城周辺遺跡の様相一城外の道路と方格地割」『第20回古代城郭官街遺跡検討会資料』1994
(5) 宮城県教育委員会「山王遺跡一多賀前地区第1次調査 仙臺道路建設関係遺跡平成4年度調査概報」宮城県文化財調査報告書第153集 1993



図版1 昭和24年当時の調査区周辺

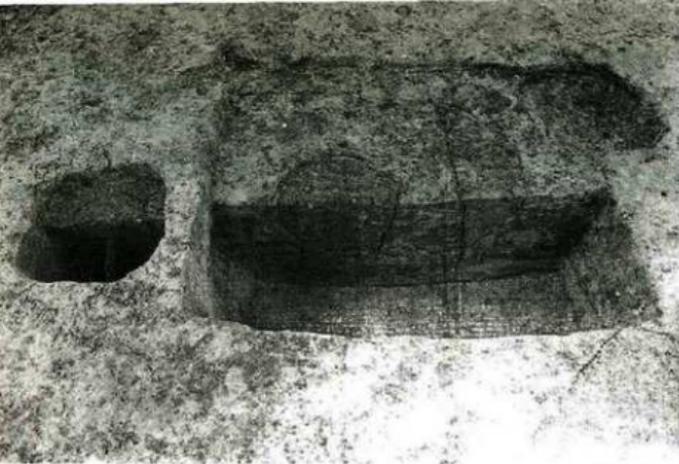
この写真は米軍撮影の空中写真を建設省国土地理院の承認を得て、掲載したものである。



図版2 東半部遺構検出状況(西から)



図版3 上：調査区全景（東から）
下：調査区全景（西から）



図版 4

- 上：S B 541建物跡
（北側柱列西妻より1間目柱穴）
中：S B 550建物跡
（西側柱列北妻より2間目柱穴）
下：調査区南西隅の埴地層
（柱穴の壁にその断面が見える）

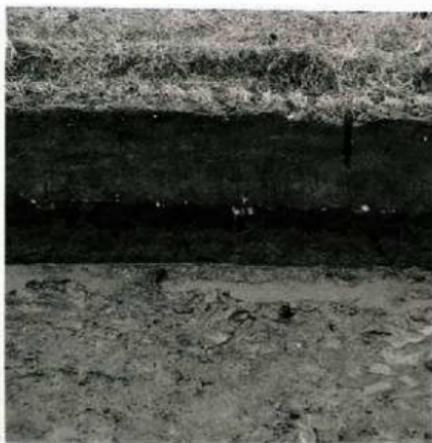
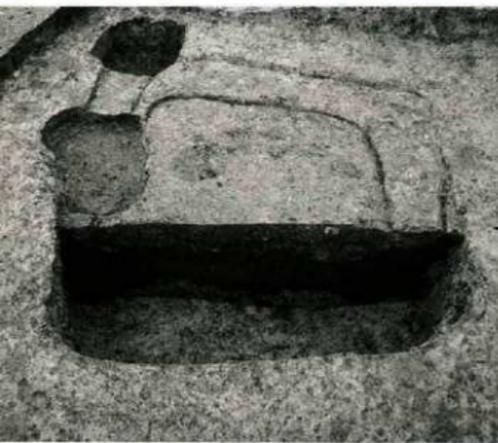


図版 5

上：調査区南西隅の整地層と
建物跡

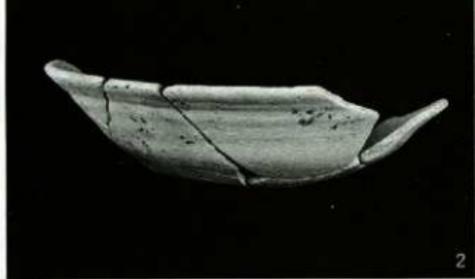
中：S D 554・555溝跡検出状況
(南から)

下：同 上 (北から)



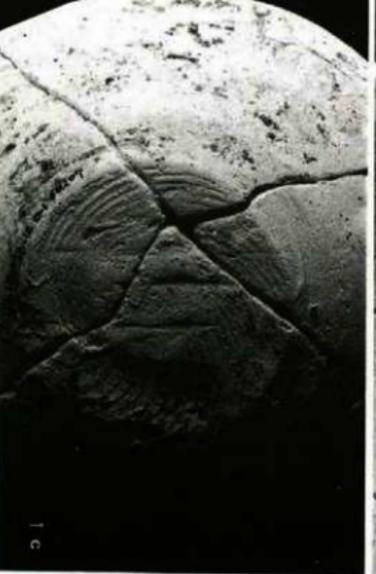
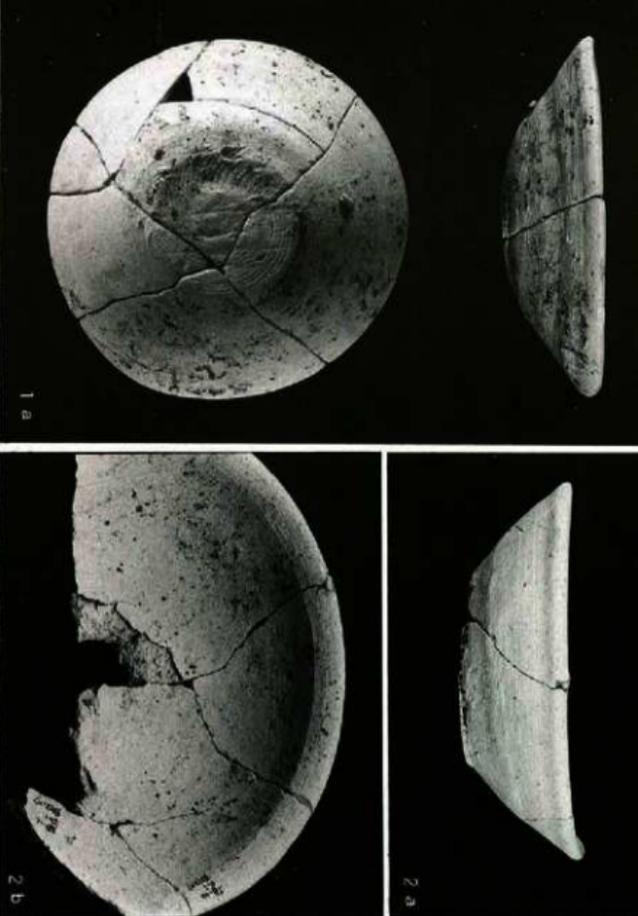
図版6 上：SD554溝跡埋土断面（調査区南端部）
中右：調査区北壁土層堆積状況

中左：SK572土坑
下：調査区遠景（東から）

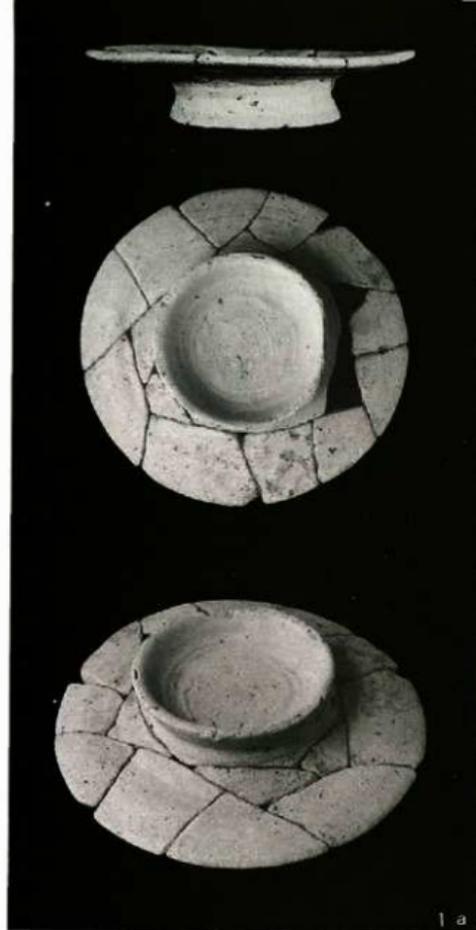


1 赤焼き土器 杯 SK580 (R-31) 第24回50
 3 ◇ ◇ SK580 (R-34) 第24回51
 5 ◇ ◇ SK580 (R-33) 第24回54
 7 ◇ 高台杯SK565 (R-11) 第22回35

2 赤焼き土器 杯 SK580 (R-35) 第24回48
 4 ◇ ◇ SD577 (R-14) 第20回12
 6 ◇ ◇ SK581 (R-111) 第25回55
 8 ◇ ◇ SD577 (R-45) 第20回14



- 1a 赤焼き土器杯 SD577 (R-13) 第20図 11
- 1b 同上内面
- 1c 同上底面
- 2a 赤焼き土器杯 SD577 (R-15) 第20図 13
- 2b 同上内面



1a 赤焼き土器 高台小型皿 SK 578 (R-27)
第23図 36

1b 同上 内面

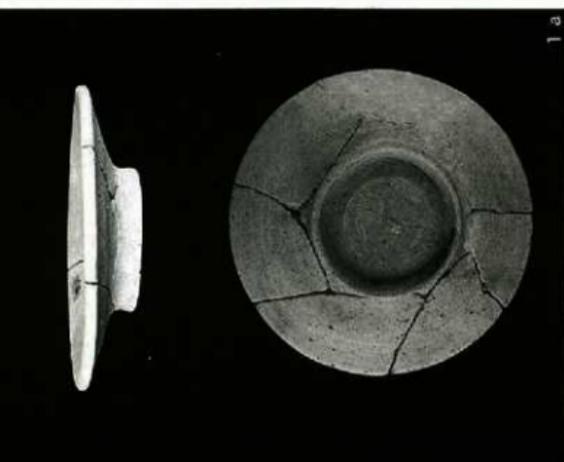


2a 赤焼き土器 高台小型皿 SK 586 (R-71)
第25図 61

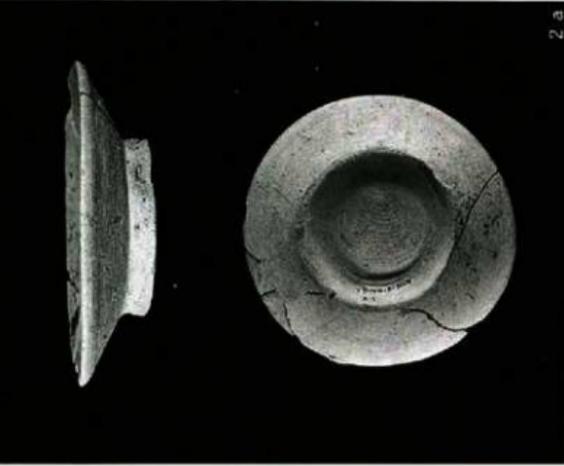
2b 同上 底部 (螺旋状点列)

2c 同上 内面

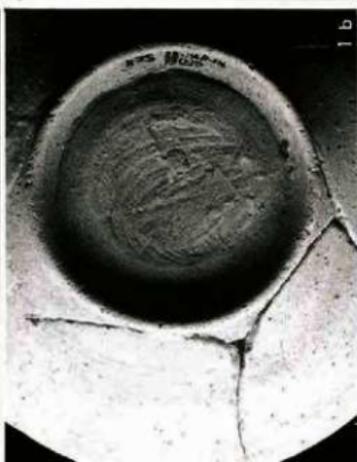




1 a



2 a



1 b

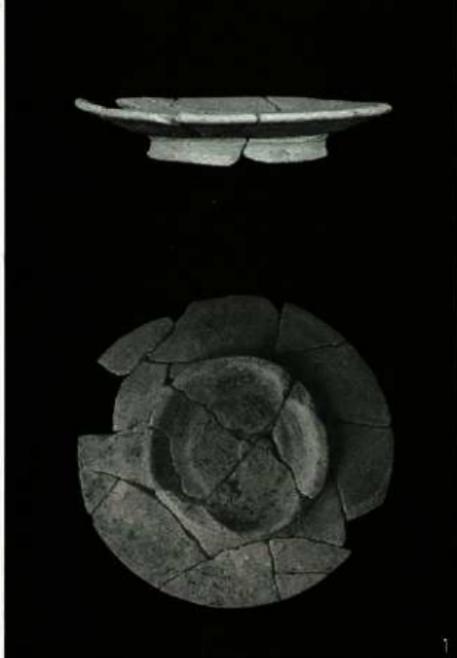


2 b

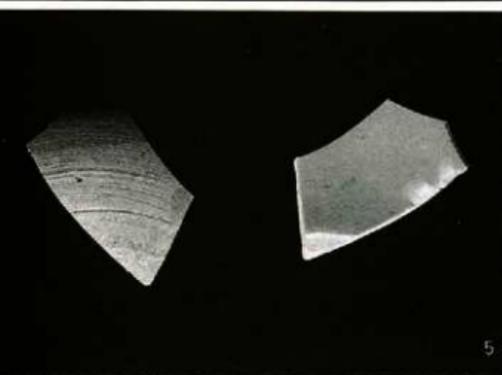


3

- 1 a 赤燒老土器 高台皿 SK 85 (R-25) 第25図 1 b 同 底部
 2 a 赤燒老土器 高台小型杯 SK 565 (R-9) 第29図 3 2 b 同 内面
 3 赤燒老土器 高台小型杯 SK 565 (R-6) 第22図 4

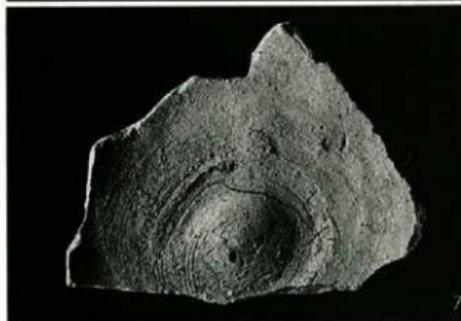
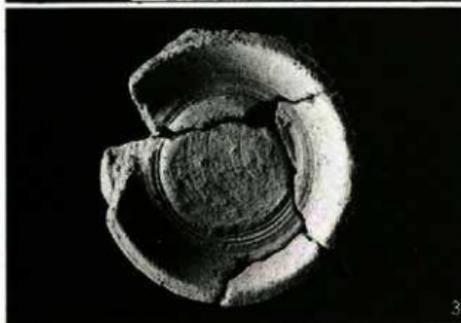


- 1 赤焼き土器 高台小型杯 (R-1)
SK565 第22回25
- 2 赤焼き土器 杯 (R-26)
SK578 第23回39
- 3 赤焼き土器 小型杯 (R-57)
第Ⅲ層 第27回81
- 4 a 赤焼き土器 杯 (R-55)
第Ⅲ層 第27回70
- 4 b 同上内面



- 1 赤焼き土器 柱状高台皿 第Ⅲ層 (R-52)
第27図83
- 2 土 鉢 器 把手付土器 第Ⅲ層 (R-69)
第27図104
- 3 土製カマド 第Ⅲ層 (R-58)
第28図106
- 4 不明土製品 w区 第Ⅰ層 (R-68)
第30図129
- 5 施釉陶器 皿 w区 第Ⅰ層 (R-70)
第30図126

図版12 出土遺物(6)



- | | | | |
|--------------|---------------|------------------|---------------|
| 1 乾燥時の圧痕 | SK579 (R-40) | 2 ロクロから切り離し後の再調整 | E区第三層 (R-56) |
| 3 高台内の状況 | SK565 (R-128) | 4 高台内の状況 | SD577 (R-106) |
| 5 同上 | SD577 (R-105) | 6 割離した高台の痕跡 | SD577 (R-127) |
| 7 ロクロナデ (内面) | SD577 (R-109) | 8 粘土紐巻き上げ痕 第20回図 | SD577 (R-12) |

※ 1.3~8 赤焼き土器 2 土師器

大日南・門間田地区試掘調査

目 次

I 調査区の位置と地理的・歴史的環境	57
II 調査方法と成果	57
III ま と め	60

調 査 要 項

1. 調査地区 多賀城市高橋字門間田1-1他
 * * 大日南99他
2. 調査面積 1.350㎡ (対象面積 8,500㎡)
3. 調査期間 平成6年1月26日～2月10日
4. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
5. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 杉田 裕孝
 調査員 千葉 孝弥 武田 健市
6. 調査参加者 赤間 栄二郎、吾妻 久、一条日出夫、伊藤 正直、下道 博信
 鈴木 太伴、大道寺 勉、千葉 享一、橋本 務、矢口 進一

I 調査区の位置と地理的・歴史的環境

本地区は、現在の土地区分でいうと高橋地区と総称される地区であり、多賀城市の南西部に位置している。本地区の約1.3km南側を国道45号線が通っているため、国道から本地区にかけては、比較的早い段階に宅地化が進行したようであり、このことが本地区における埋蔵文化財の発見を遅らせた原因の一つと考えられる。

さて、本地区は海拔3.7mの微高地上に立地している。この微高地は、現在の七北田川から海岸部にかけての広い範囲に分布しているもので、河川や海的神積作用によって形成されたと考えられる。しかし、その広い範囲全体が微高地ではなく、大小の湿地が各地点に分布している。また、旧七北田川が本地区の北側を東流していたと見られ、明治19年の地籍図や昭和24年の航空写真の上に旧河道をたどることができる。

本地区周辺の遺跡としては、北東約0.6kmの地点に大日北遺跡、南西約1.1kmの地点に発向遺跡、南約1.1kmの地点に高柳B遺跡、南約2.1kmの地点に高柳A遺跡などが知られている。高柳A遺跡で試掘調査が行われているが、その他の遺跡ではこれまで調査は行われていない。また、本地区の南東約0.7kmの地点を昭和58年、62年に市教育委員会が試掘調査を実施したところ、弱な亜泥炭層が厚く堆積する地盤であり、溝跡数条を発見したのみであった。この地区は本地区より0.9~0.7m地盤が低く居住地には適さない場所であったことが判明している。

II 調査方法と成果

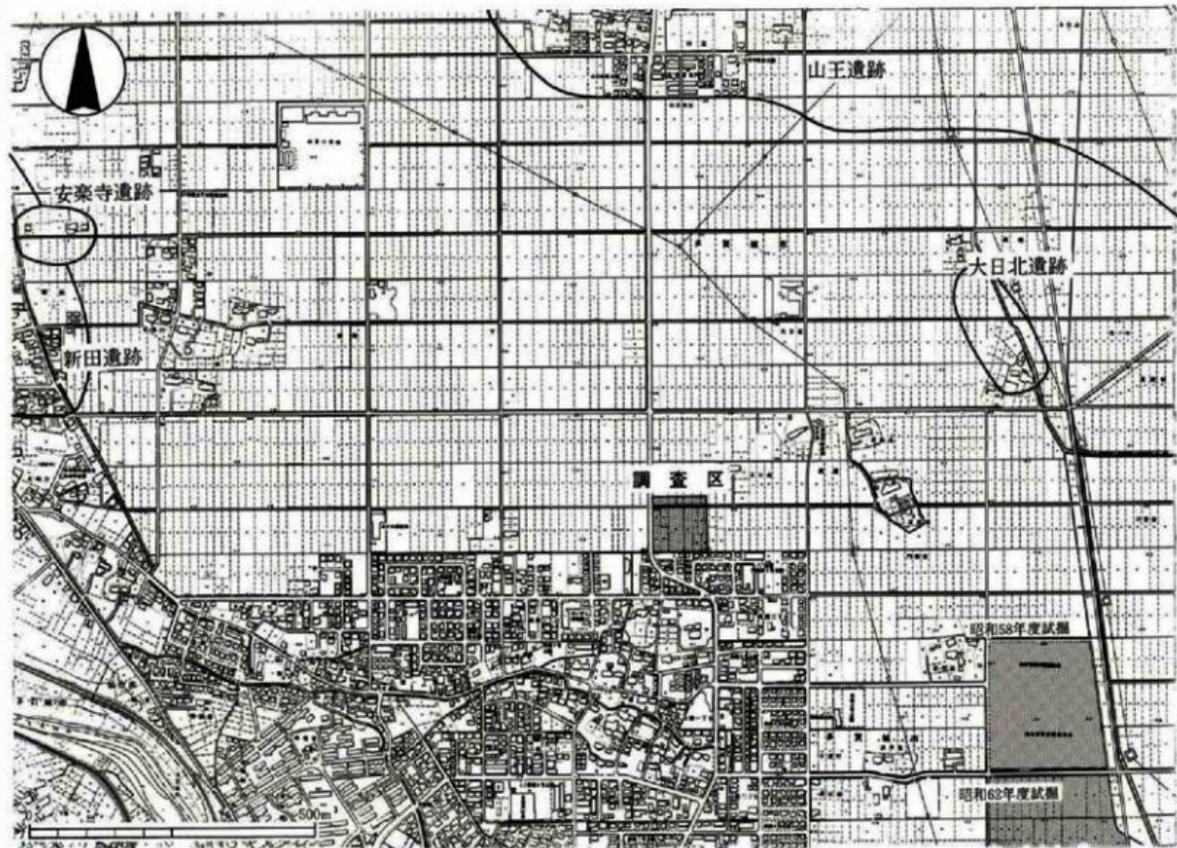
今回の調査は、遺構の有無を確認し、前者の場合はその分布状況を把握することを目的としている。そこで、対象地区全体に南北トレンチ7条、東西トレンチ4条を設定した。その結果数は少ないものの、調査区全体に遺構が存在することが判明した。発見した遺構は、溝跡21条、土坑5基である。以下、トレンチごとに概要を述べる。

No. 4 トレンチ

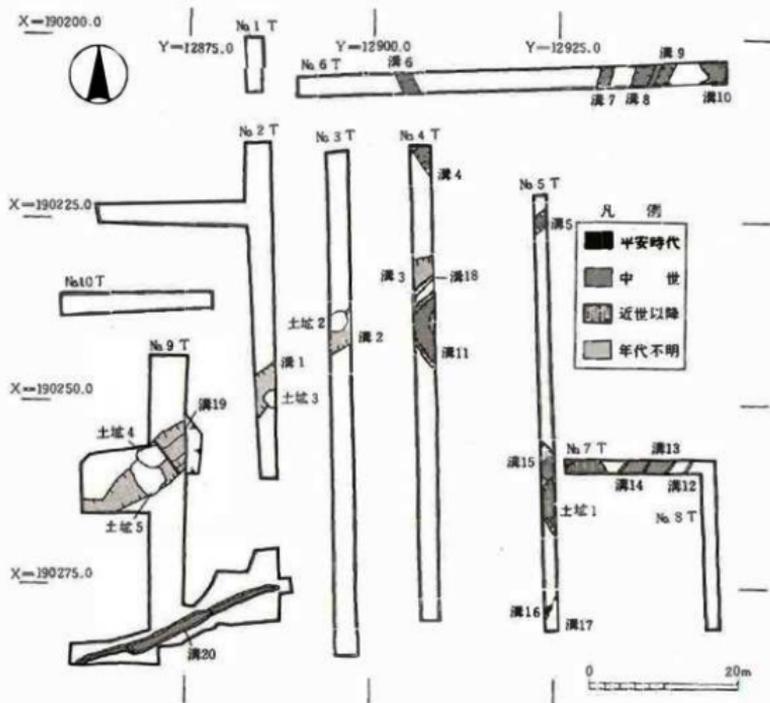
北端部で溝4、中央部で溝3・18・11を発見した。溝11は上幅4.8~3.0mであり、直角に折れ曲がる溝である。ほぼ同位置で2時期の重複があり、新しい段階のものが内側によっている。埋土中から中世の無釉陶器が1点出土している(図版4-6)。

No. 5 トレンチ

北端部で溝5、南半部で溝15・16・17土坑1を発見した。溝5と溝15は溝11と一連のものと思われる。溝16は上幅約1.2mの小規模な溝で、埋土最上層の粗砂から10世紀中頃の赤焼き土器小型杯が1点完全な形で出土している。土坑1からは18世紀以降の陶器が出土している。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構配置図

No. 6 トレンチ

西半部で溝6、東半部で溝7～10を発見した。溝10はほぼ直角に折れ曲がる溝と見られ、溝5と同一の可能性が有る。溝9は上幅約1.8mの南北溝で中世の無軸陶器が1点出土している(図版4-4)。

No. 7 トレンチ

溝12～14と、土壇1の東半分を発見した。溝13は溝12・14より古い南北溝で、下幅約1.6mである。中世の無軸陶器が1点出土している。溝12からは19世紀以降の陶磁器が数点出土している。

No. 9 トレンチ

北半部で溝19、土壇4・5、南半部で溝20を発見した。溝20は東西発掘基準線に対し東で約

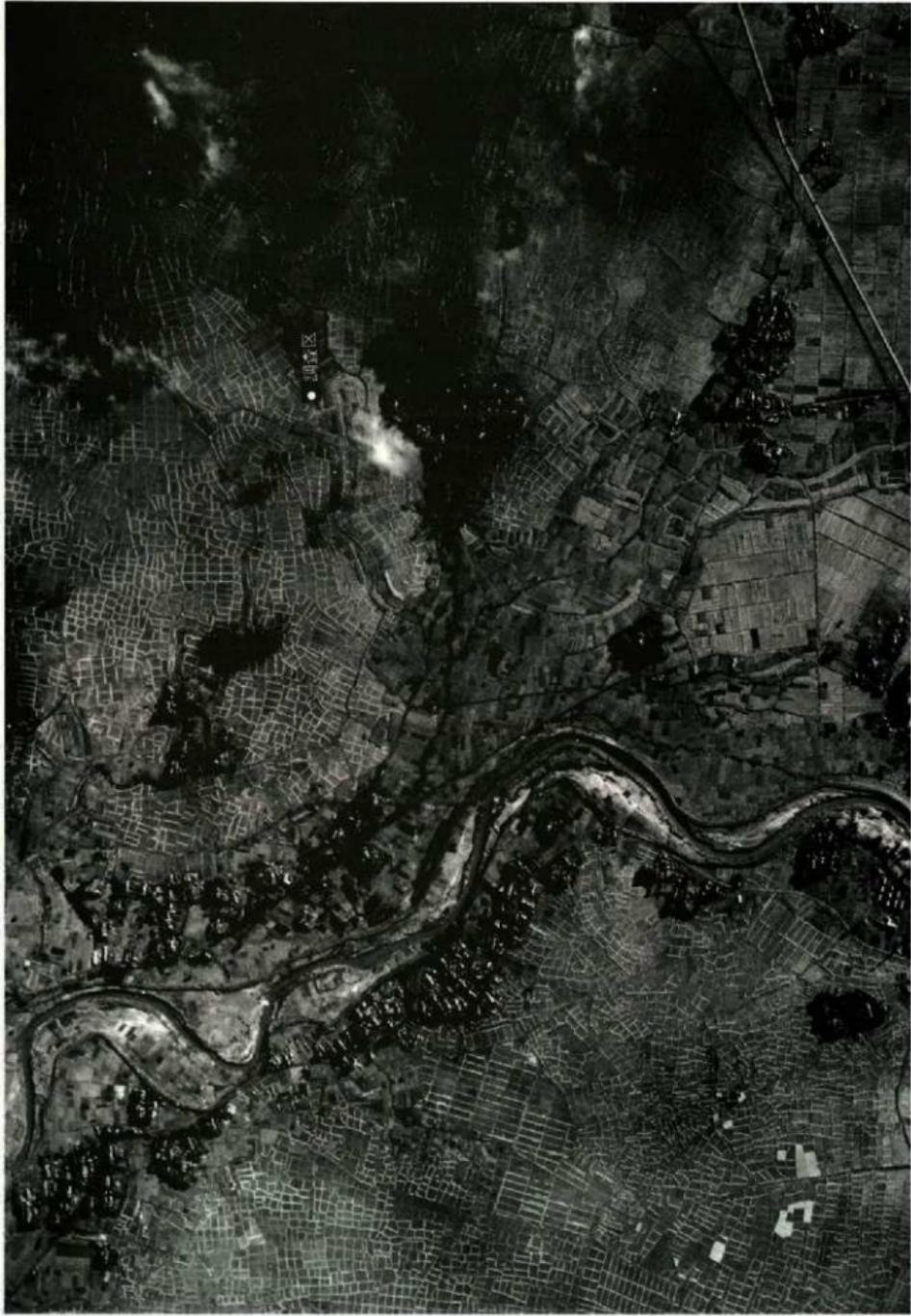
20度北に偏する方位の東西溝で約30m 検出した。本溝跡はこのトレンチの東側にはのびないことを確認している。規模は、トレンチ中央部付近が上幅約3.2m、深さ0.4mであり、他の部分は上幅2.2～1.6m、深さ約0.3mである。中世の無軸陶器壺とカワラケが出土している（図版4-2・10）。無軸陶器は正格子と長格子を組み合わせた押印のあるもので緑色の自然釉がかかっている。カワラケは口縁部の小片でログロ調整されたものである。溝19は上幅0.6～0.3mの規模をもち、埋土は上層が地山と近似した黄褐色の砂、下層がグライ化した粘質土となっている。遺物は全く出土しておらず、年代は不明である。№2トレンチの溝1、№3のトレンチの溝2、№4トレンチの溝3は、方向や埋土の状態から同一の溝と考えられる。

Ⅲ ま と め

1. 平安時代から江戸時代にかけての遺構を発見し、本地区が埋蔵文化財包蔵地であることを確認した。この結果、本地区周辺の微高地上にも遺跡が存在することが予想される。
2. 平安時代の遺構として溝1条を発見した。10世紀中頃の赤焼き土器小型杯が1点完全な形で出土している。性格については不明である。
3. 中世の遺構としては溝12条を発見した。出土した無軸陶器から12～14世紀の年代が考えられる。また、表土から15～16世紀の青甃が出土しており、該期の遺構の存在も考えられる。
4. 中世の溝は、直線的にのびるものやほぼ直角に折れ曲がるものなどがある。方向的にも共通性があり、これらは方形にめぐる一連の区画溝と考えられる。中世におけるこのような溝のあり方は、新田遺跡寿福寺地区で発見しているような屋敷の周囲にめぐらされた溝に類似している（多賀城市埋蔵文化財調査センター：1990）。今回の調査では、区画溝の内部の様子は明らかにできなかったが、新田遺跡で発見しているものと同様の屋敷跡と考えられる。

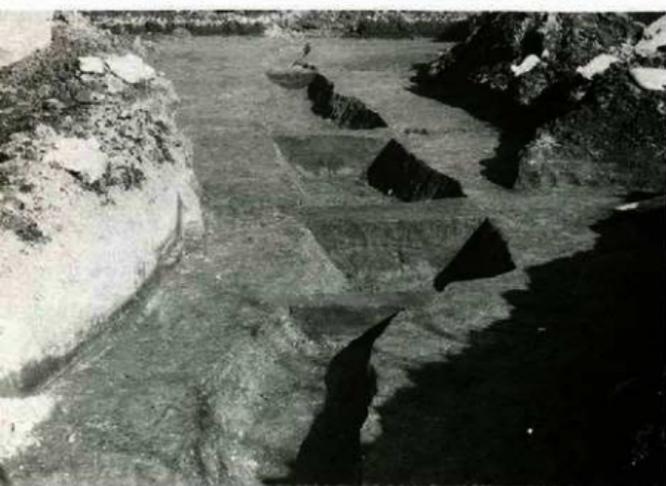
引用参考文献

- 多賀城市埋蔵文化財調査センター（1990）：「新田遺跡—第4・11次調査報告」
『多賀城市文化財調査報告書』第23集



図版1 昭和24年当時の調査区周辺

この写真は、米軍撮影の空中写真を建設計画国土地理院の承認を得て複製したものである。



図版 2

上：No 6 T東半部 溝跡検出状況
(南西より)

中：No 6 T 溝跡9 (南より)

下：No 9 T南端部 溝跡20 (西より)



図版 3

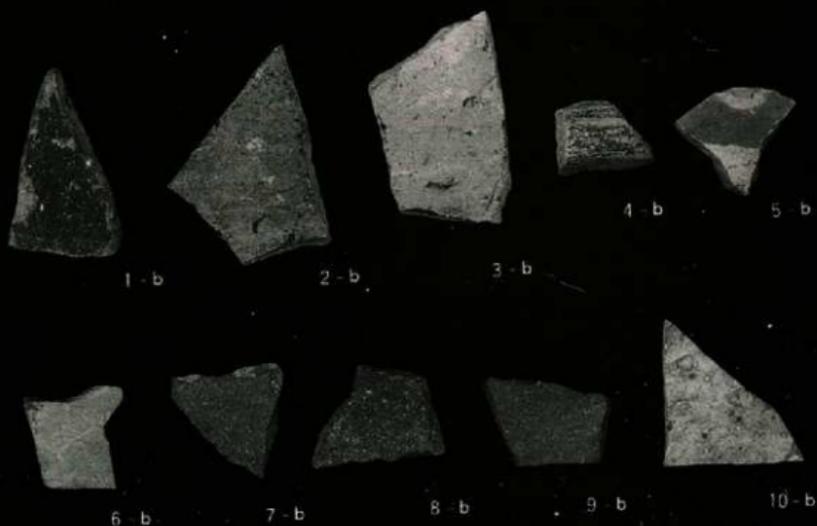
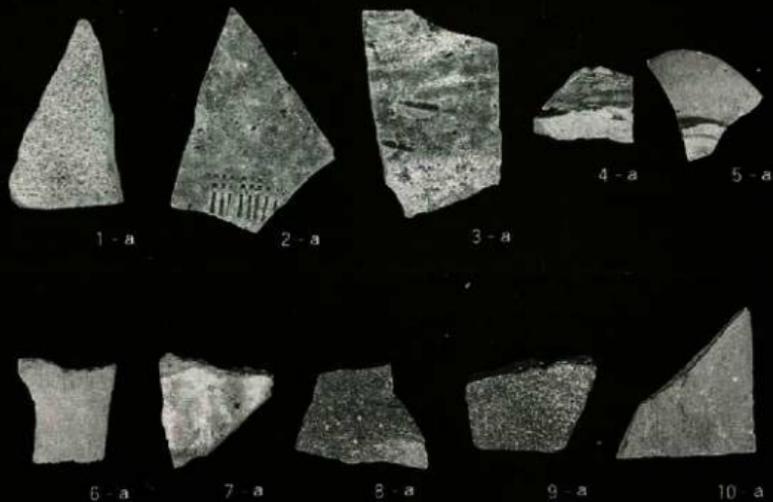
上：No 5 T 溝跡16

赤焼き土器出土状況

中：同上

下左：No 2 T 全景（北より）

下右：No 4 T 全景（南より）



- 1 No 2 T 第I層 2 No 9 T 溝跡20 1層 3 No 9 T 第I層 4 No 6 T 溝跡9 1層
 5 No 4 T 第I層 6 No 4 T 溝跡11 1層 7 No 7 T 第I層 8 No 7 T 溝跡13 1層
 9 No 4 T 溝跡11 2層 10 No 9 T 溝跡20 1層

(1~4, 6~10 無釉陶器, 5青磁碗)

圖版4 出土遺物

多賀城市文化財調査報告書第35集

市川橋遺跡 ほか

— 平成5年度発掘調査報告書 —

平成6年3月31日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号

電話(022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話(022) 368-1141

印刷 渡 辺 印 刷

塩釜市旭町17番13号

電話(022) 364-3161
